
ドキめも...？

成田チカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドキめも…？

【Nコード】

N2025R

【作者名】

成田チ力

【あらすじ】

金平美奈子は乙女ゲー好きな主婦。ある日、新作乙女ゲー「ドキドキめもりーず3」をプレイしようとしたら、何とゲームの世界に入っちゃった。15歳の高校1年生になった美奈子は、人生2度目の高校生活をスタートさせる。攻略対象男子が次々に現れるのに、どうやら美奈子本人はこのゲームの主人公ではないらしく…。えー。そんなのって、あり？ 果たして美奈子は「ドキめも」に食い込むことができるのか？

1話 「御入学」

冬の柔らかな日差しを窓越しに顔に感じながら、金平美奈子かなひら みなこはふう、と溜息を一つ吐いた。少し白っぽく見える窓の外の景色が、美奈子の息でさらに曇った。

寝室から夫の恭平きょうへいが出てくる音が聴こえ、美奈子はのろのろと居間から玄関に向かった。夫は玄関で靴を履きながら美奈子に言った。

「今日も遅くなる」

「わかったわ。いつてらっしゃい」

「ああ」

夫はそのまま、美奈子と目を遭わせることも無く、外へと出て行った。と、同時に洗濯機のブザーが聴こえて来た。

「はいはい。今、行きますってば」

洗濯物を干しながら、空を眺める。今日もいい天気だ。けれど、

美奈子の気分は晴れない。昨日、街に買い物に出た時に高校時代の友人、桃川祥子ももかわしょうこに偶然会ってからというもの、美奈子の心には悶々とした黒い霧がかかったようだ。

（やだわ、こんなの…。私らしくない。向こうは向こう、私は私。それはわかってる。けど…）

祥子と美奈子は仲が良く、背格好も似ていたので、高校時代は二人でいると双子のようだとよく言われた。そんな2人も高校卒業後は進路が分かれ、美奈子は短大へ、祥子は四年制の大学へと進んだ。高校時代から将来のことが漠然としすぎていた美奈子と違い、祥子は大学の経済学部を卒業した後、一流企業に就職し、その3年後にはポーンと身軽にアメリカの大学へと留学した。アメリカでMBAを取った後、数年間は向こうの会社で働いていたようだが、その後日本に帰国して、今は確か、コンサルティングだか何だかの仕事をしているはずだ。

お互い、時々連絡を取り合ってはいたものの予定が合わず、会

うことはほとんど無かった。それなのに昨日、偶然に街で遭遇したのだ。

美奈子には祥子がすぐにわかった。祥子は昔とほとんど変わっていなかった。ハッキリした顔立ちには目元が印象的なメイクが施され、意志の強そうな瞳が昔と変わらない光を放つようだった。グレーのパンツスーツをスッキリと着こなし、彼女の周りだけ空気が違っているようにさえ感じた。

祥子に声を掛けるのを美奈子は一瞬躊躇い、少し離れたところから彼女の様子を見ていた。祥子は仕事中的なのか、スーツ姿の若い男性と女性と一緒に何か立ち話をしていた。

そのまま声を掛けずに立ち去ろうかと思った瞬間、美奈子に気付いた祥子が声を掛けた。

「美奈子？ 美奈子じゃない？」

美奈子はその場からすぐに逃げ去りたかった。自分は地元であるせいもあってカジュアルな格好をしていたし、メイクすらしていない。しかし、あつと言う間に祥子は美奈子のすぐ側まで歩み寄っていた。

「…祥子？」

「ああ、やっぱり美奈子ね？ 違ってたら恥ずかしいなと思ったけれど、思い切って声を掛けてみてよかった！」

昔と変わらない笑顔で生き生きと晴れやかに微笑む祥子を見て、美奈子の身体の奥底がチクリと痛んだ。

「何年ぶりかしら。ひよつとして、美奈子の結婚式以来？」

「そんなになる？ だとすると、もう五年以上も会ってなかったのね。でも、あなたは全然変わらないわね」

「そう？ フフ。ありがとう。あなたもそんなに変わってないわよ？」

「お世辞はいいわよ。太ったのはわかってるから」

二人はお互いの連絡先を確認すると、近いうちに食事でもしよう

と言って別れた。

どうしてこんなに違ってしまったのか。

そんなことを思うのは不毛だとはわかっている。

でも、いくらその考えを頭の中から振り払おうとしても、もやもやとした霧は晴れてはくれない。そして、美奈子はそんな自分が何よりも嫌いだった。頭ではわかっているつもりなのに、心がいつまでもウジウジと同じ事を考え続ける。

―容姿も成績も、双子のようにずっと同じようなものだったのに。今の二人のこの差は何？

―私も、もしかしたら今の祥子のようになれていたの？

―それなら、私はどこで何を間違えてしまったの？

美奈子は雑念を払うように頭を横に振ると、キッチンに行ってお茶を淹れた。時計を見ると、まだ昼まで時間がある。今日のパートのシフトは午後1時からの予定だから、昼までのんびりできる。

「お昼まで、ゲームでもしようかな」

美奈子はそう言いながら携帯ゲーム機をキッチンのカウンターの隅から取り出した。

「ゲームの世界はいいわよね。間違えたらやり直せるし」

独り言を言いながら、キッチンの戸棚に隠しておいた新しいゲームソフトのパッケージを取り出した。美奈子は最近、巷で「乙女ゲー」と呼ばれる恋愛シミュレーションゲームが好きで、特に主人公が高校生活を送る「ドキドキめもりーず」という作品にハマっている。パートの仕事をしているのも、ゲーム代欲しさのためだし、実は昨日の買い物も、予約をしていた「ドキドキめ」の最新版「ドキドキめもりーず 3」の発売日で、それを取りに行っていたのだ。

「さーて、どの子から攻略しようかな」

箱を開け、説明書をパラパラとめくりながら登場人物の絵を眺める。どの登場人物も個性的だ。

「ま、とりあえずやりながら決めようかな」

ソフトをゲーム機に差し込んで、電源を入れた。ゲームの起動音がする。美奈子はいつも新しいゲームを買ってそうするように、じつと画面を覗き込む。ゲームのオープニング画面が出てくるのを、まるで映画か演劇の幕が開くかのように、じつと待つ。

画面の上の「Now Loading」の文字が消えた。

「うつつ。ドキドキするっ」

だが、オープニングの映像が流れるはずのその画面から突然、強い光がほとばしり、美奈子の周りを包み込んだ。

「えっ？」

あまりの眩しさに、美奈子は目を細めた。次の瞬間、ジェットコースターに乗っているかのような、引力に逆らうような妙な感覚が美奈子の全身を覆った。

「きゃあ~~~~！」

叫び声を上げながら身体を丸めていると、身体に何か当たる衝撃がした。

「い、痛……」

呻く美奈子の横で何かが動く気配がしたと思った瞬間、「イッテ——！」と言う男の子の呻き声が響いた。

「えっ？」

目を開けて声の方を見ると、高校生くらいの男の子が、美奈子を抱きかかえたまま地面に倒れこんでいて、美奈子は彼の上に乗っているような状態だった。

「き、きゃあああ！」「ごめんなさい！」

美奈子が慌てて男の子の身体から飛びのくと、男の子は頭を押さえながら起き上がった。

「いや、いいけどさ……。君は怪我、無い？」

「私は大丈夫。ごめんなさいね？ 重かったでしょう？」

男の子は「いや、別に……」と言いながら身軽に立ち上がると、まだ地面に座ったままの美奈子に向かって手を差し伸べた。男の子は

背が高く、逆光で顔がよく見えない。

「立てる？」

「え、ええ……。ありがとう……」

差し出された大きな手を恐る恐る掴んで立ち上がり、身体についた泥を落とそうとして初めて、美奈子は自分が制服のようなものを着ていることに気付いて硬直した。

（え？）

緑と青のチェックのスカート。しかも、丈は膝より上。足は紺のロングソックスを履き、茶色の革靴を履いていた。上は白のブラウスに濃紺のブレザー。左胸には何かのエンブレム。胸元には赤いリボン……。

（何、これ……。私的に、全くありえない格好なんですけど）

制服にも驚いたが、痩せている自分にも驚いた。この体型はいつ以来だろう。

（夢……？）

ベタな技だけれど、頬をつねってみる。痛い。

「つつ！」

「君、大丈夫？」

先ほどの男の子が自分で自分の頬をつねっている美奈子を心配して、声を掛けてきた。

「え？ えつと……。さあ？」

困惑顔の美奈子を見て、男の子は「まいったな」と言いながら右手で頭を掻いた。

「ま、その制服ってことは、行き先は同じだろ？ 早く行かないと初日から遅刻だ。急ごう！」

「え？ あ、ちょっと待って！」

「早く来いよ！」

とりあえず、美奈子は走り始めた男の子の後をついて、一緒に走り始めた。

走って行くにつれて、美奈子と同じ制服を着た人たちを見ることが多くなった。

（一体、どこに向かっているの…？）

彼らが向かう先に、大きく校門を開け放った学校らしき建物が見えてきた。門の横に、金色に輝くプレートがある。

「私立 瑛星学園高等部」

校門を通り過ぎると、目の前に大きな白い校舎が見える。その中央には、制服に付けられた物と同じエンブレムが光っていた。

（瑛星学園…？ 聞いたことがあるような…。どこだっけ？）

校門を入ると、美しい桜並木が続いている。どの木も満開の花を咲かせている。

（桜…？ 今って、冬じゃなかった？ それに、この風景、どこかで見たような…。うーん？）

あちこちに、美奈子と同じ制服を着た男女が楽しそうに話をして
いる。

（何か、『ドキめも』に出てくる学校みたい。って、あ、えええっ？）

美奈子の中で、何かがピッタリと合わさったような感覚がした。
（ちよっと待った！ 瑛星学園って、『ドキめも』の舞台になつて
る学校と同じ名前じゃないの？）

何かの間違いだろうと思う。だが、校舎は『ドキめも』の1と2
を既にプレイ済みの美奈子には馴染みのある外観だし、制服もゲー
ムの説明書に描かれた登場人物たちが着ていた物とデザインがよく
似ている。だが、美奈子には何故、自分がこの制服を着て、この校
舎にいるのがさっぱり理解できない。

「えーっと、クラス分けはどこだ？」

美奈子と一緒に走ってきた男の子が、校舎の前を見渡した。

「あ、あそこだな。人だかりがあるし。ほら、行こうぜ！」

「あ、ちよっと待って！」

息を切らせながら男の子に迫い着くと、美奈子は男の子に尋ねた。

「ねえ、ここって…」

「あ、俺、A組だ。君は？ そのリボンの色は、同じ学年だろ？」
興奮した様子で美奈子に話しかける男の子を見ながら、美奈子はガツクリと肩を落とした。

（聞いてないし…）

男の子は美奈子の様子を見て、「あ、そうか」と何やら納得した様子で美奈子に尋ねた。

「あ、もしかして、そこからじゃ見えないのか？ 俺が見てやるよ。名前は？」

名前を尋ねられ、美奈子は咄嗟にいつも『ドキめも』で使っている自分の旧姓で答えた。

「桜木美奈子。桜の木に…」

「美しいと奈良の奈で子？ A組だ。一緒だな、桜木。これから1年、よろしくなっ」

二カつと爽やかに微笑む少年を見ながら、美奈子は混乱していた。
（何なの、この展開…。嘘だ。嘘だ…。何かの間違いだってば。じやなかったら、ドッキリ…。私、何の変哲も無い一般主婦ですけどっ）

目の前の男の子が呆然としたままの美奈子を見ながら、腰を少し屈めて美奈子に顔を近づけた。近くで見ると彼は涼しげなキレイな顔をしていて、美奈子は一瞬、不覚にもドキツとした。

「何だよ。俺と一緒にのクラスが嫌なのかあ？ 1年A組…」

「1年…」

（つてことは、私は今、15歳…？）

「大丈夫か？ そう言えば、君ってさっきも空から落ちて来たよな。保健室に行くか？」

「いえ、結構です」

「じゃ、早く教室に行こうぜ！」

男の子は爽やかに微笑むと、さっさと昇降口に向かって歩き始めた。仕方なく美奈子が彼の後ろを歩いて行くと、彼はふと立ち止ま

って振り返った。

「あ、俺、まだ名乗ってなかったな。俺は緑山剛。みどりやまごう よろしくな、桜木」

（緑山、剛…？ 何か、聞いたことがあるような…）

美奈子の脳裏にふと、「ドキめも」のブックレットが甦った。

（あれ？ もしかして、「ドキめも」の攻略対象の一人がそんな名前だったかしら…？）

考え事をしている美奈子の肩を剛が軽く叩いた。

「本当、大丈夫か、桜木？ ほら、早く教室に行こうぜ」

「うん。よろしく、緑山君」

下駄箱にも、教室の机にも、「桜木美奈子」の名前がきちんと書かれていた。何故か持っていたバックの中には、カワイイ携帯や筆記用具も入っていた。

（何なの、これ…）

新学期なのが幸いして、美奈子が周りの人間を誰一人知らなくても、何とか誤魔化せた。教室で所定の机に座ると、美奈子の近くにいた女の子が声を掛けてきた。最初は少しぎこちないながらも、会話を始めて少しすると、何となく会話が弾み始めた。

「あ、私の名前は藤寺ヒカル。私は中等部からのエスカレーター組なんだ。よろしくね？」

「私は桜木美奈子です。こちらこそ、よろしく」

「美奈子ちゃんか。あのさ、『ミナちゃん』って呼んでもいい？」

「うん。もちろん。ヒカルちゃんは、『ヒカルちゃん』でいい？」

「もちろん！」

「うふふ…」

（ああ、何か新鮮だな、こういう会話…）

美奈子は、二十数年ぶりの女子トークに馴染んでいる自分が不思議だった。

（これも普段『ドキめも』とかプレイしてるお陰かしら…）

ヒカルと話している美奈子の視界の端に、緑山剛が入った。どうやら他の男子と話に盛り上がっているらしい。ヒカルが美奈子の視線に気付き、剛をチラツと見て言った。

「ミナちゃんと緑山君って、お友達？」

興味津々といった顔をして尋ねるヒカルに、美奈子は微笑みながら首を横に振った。

「うん。今日知り合ったの。ここに来る途中でぶつかっちゃって」

「へえー。そうなんだ。あ、健太^{けんた}！」

ヒカルが手を振ると、その先にいた男子が振り向いてヒカルに向かって手を振った。

「友達？」

「うん。小学校が一緒だったの。そう言えば、ミナちゃんはどの学校に行ってたの？」

ヒカルのこの問に、美奈子は言葉が詰まった。

「あー。えーっとね、この街じゃないんだ」

「引っ越してきたんだ？」

「う、うん」

「そうなんだ。じゃ、今度街の中を案内してあげるよ」

「ありがとう」

そんな会話をしていたら、教室の中にスーツ姿の男性が入ってきた。

「全員、速やかに指定されてる席に着きなさい」

ガタガタという音がそこから聴こえ、すぐに教室の中が静まり返る。教室の中の生徒全員の視線を浴びながら教壇に立ったその人の姿を見て、美奈子は息を飲んだ。

（う、嘘……。恭平さん……？）

担任の先生が、黒板の上に大きな文字で「金平恭平^{かなひらきょうへい}」と書いた

「この、1年A組の担任を務めることになりました、金平恭平です。担当教科は古文です。1年間、よろしく」

担任は、美奈子の夫に瓜二つだった。名前も同姓同名だ。整えら

れた髪形も、フレームレスのメガネも同じ。だが、良く見ると、担任の方が美奈子の夫よりも大分若く見えるような気がした。

「では、入学式まであまり時間が無いので、早速だが点呼を取る。

あおきほのか
青木遥」

…返事が無い。

「青木？」

金平の呼びかけに、誰も返事をしなかった。それもそのはずで、その生徒に指定されているはずの席が空のまま。金平はふう、と溜息を一つ吐いてから出席簿に視線を落とした。

「次、赤井健太」

「はい！」

ヒカルの友人だ。

その後も点呼は次々と進んだ。金平に自分の名を呼ばれて返事をした時、美奈子と金平は目が合ったが、彼は美奈子の顔を少し確認しただけで、特に変わった反応を見せなかった。

ヒカルが点呼で元気に返事をした後、美奈子は再び自分の目を疑った。

「桃川祥子」

「はい」

彼女は美奈子の高校時代の親友、祥子に良く似ている。名前も、同じ。

美奈子の視線に気付いたのか、祥子が美奈子に微笑んだ。美奈子はその懐かしい笑顔にドキッとすると同時に、何故か罪悪感を感じて俯いた。

（何なの、ここは…。恭平さんだけじゃなく、祥子まで？ 何の冗談よ？）

美奈子は妙に落ち着かない気分のまま、入学式に挑んだ。

入学式の後、教室に戻ってからは簡単なホームルームがあった。簡単な明日からの説明などがあった後、下校という段階になって、

美奈子はあることに気が付いた。

（私…。一体、どこに帰ればいいの？）

持っていたカバンの中を見てみたが、家の住所が書かれたようなものは見当たらない。

（そりゃそうよね。高校生にもなって、家の住所とか持ち歩かないわよね、普通…。でも、どうしよう）

とにかく外に出てみようかと立ち上がり、教室を出ようとした時に、美奈子は後ろから聴き慣れた声に呼び止められた。

「桜木。ちょっと待ちなさい」

振り向くと、そこには金平がいた。

「は、はい。何でしょう？」

「保健医の小波先生こなみから君への言伝を受けていた。帰る前に保健室に寄って欲しいそうだ」

「保健室、ですか？」

美奈子が少し首を傾げながら尋ねると、金平は確認するように頷いた。

「ああ。一階の昇降口を東側に行った奥にある。わかるか？」

「わかんと思います。ありがとうございます」

小さく会釈する美奈子に、金平がフワリと柔らかに微笑んだ。自分の夫がよく見せる表情を見て、美奈子の心がざわざわと落ち着かなくなつた。

（ああ、本当に恭平さんによく似てる…。何故…？）

美奈子が金平の顔を見上げながら微笑むと、金平は満足そうに頷いた。

「ああ。ちゃんと行くんだぞ？」

「はい。さようなら、先生」

「さようなら」

階段を一階まで降りながら、先程の状況を思い出し、美奈子はクスクスと笑った。

（「先生」だって…。笑っちゃうわよね）

美奈子の夫の恭平はサラリーマンで、「先生」と呼ばれる職業に付いたことはない。それに、実際の恭平は美奈子の2つ上だが、ここでは向こうは「先生」だから、少なくとも10歳くらいは年上だろう。

保健室は金平の言った通りの場所にあった。ドアを軽くノックすると、中から女の人が「どうぞ」と言う声が聴こえた。美奈子がゆつくりと引き戸を開けると、中には二十代半ばくらいの白衣を着た女性が机に向かっていた。

「あの…。1年A組の桜木です。ここに来るようになって言われたんですけれど…」

美奈子が恐る恐るそう告げると、女性は椅子から立ち上がって美奈子に近付いてきた。女性は背が高くスラリとしていて、長い黒髪を後ろに一つに束ねていた。涼しげな目元が印象的な、スツキリとした面立ちの美人だ。

女性は美奈子に微笑むと、「どうぞ。遠慮なく入って?」と言って美奈子に机の側の椅子を指し示した。

「あ、はい。お邪魔します…」

美奈子は扉を閉めると、指示された椅子に座り、カバンを膝の上に置いた。緊張した様子で座っている美奈子を見て、女性がクスリと笑った。

「そんなに緊張しないで、って言っても、説得力ないわよね。あなたも急にこの世界に来て、ビックリしてるんじゃない?」

「えっ?」

美奈子は女性の口から出た台詞を、信じられないと言う顔で聞いた。女性は微笑みながら美奈子の向かい側に腰掛け、足を組んだ。

「自己紹介がまだだったわね。私はこの学校で保健医こなみじゅんいをしている、小波潤子こなみじゅんこって言います。はじめまして、桜木さん」

「はじめ、まして…」

呆然とする美奈子を気に留めずに、小波は事務的に話を進めていく。

「私が今日、あなたにここに来てもらったのは…」

そう言いながら、小波は机の上から大きな茶封筒を取り出した。

「これを渡すためのな」

「はい？」

渡された茶封筒は厚みがあり、少し重かった。「1-A、桜木美奈子」と書かれている封筒を、美奈子はじっと見つめていた。

「見てないで、開けて中の物を確認してくれるかしら？」

小波に促され、美奈子は茶封筒を開け、中身を取り出した。中から出てきたのは水色の表紙が付いた数十ページの冊子、数枚のレポート、そして家のものらしい鍵―。

「あの、これって…」

美奈子が顔を上げると、小波はうつすらと微笑みながら頷いた。

「まず、鍵はあなたの家の鍵。住所は、そのレポートの最初のページに書いてあるし、携帯のGPS機能を使えば『自宅』で出てくるから、迷わずに帰れるはずよ？」

言われた通りにレポートに目を通すと、そこには美奈子の名前、自宅の住所、自宅と携帯の電話番号、それから家族構成や生い立ちについて書かれていた。

「これは…？」

「それは、あなたのここでの設定。いわゆる、『設定表』ってやつ？　しつかり覚えて、つじつまを合わせて頂戴ね？」

「はあ」

「それから、その水色のは、この世界の説明書みたいなものだから。基本的な暮らし方と、原則として守ってもらいたいルールが書いてあるから、これも今日中に目を通しておいてね？」

「はい？」

きょとんとしたまま見つめ返す美奈子を見て、小波は困ったように眉間に皺を寄せ、声を低くして言った。

「あなた、今、自分がどこにいるのか、ちゃんとわかってる？」

「えーっと。多分」

曖昧に答える美奈子を見て、小波が眉間に皺を寄せながら「多分？」と聞き返した。

「だって、その、私が思っているのは、あまりにも現実的ではないので…」

「いいから、言って御覧なさい」

小波に促され、美奈子はおずおずと自分の答えを口にした。

「えっと、『ドキめも』っていう、私の好きなゲームの世界の中みたいだなんて…」

笑われるのを覚悟で言ったその答えに、小波は真面目な顔で頷いた。

「正解。その通りよ」

「えっ？」

目を見開きながら驚く美奈子を見ながら、小波は両腕を胸の前で組んで椅子の背もたれに寄りかかった。

「ここは『ドキめも』の世界。今はシリーズ3つとところかしら。そしてここはドキめもシリーズの舞台になってる、あおぞら市内の瑛星学園高等部。あなたは本当は何歳かは知らないけど、ここでは今は15歳、高校一年生」

「あの、それって…。私はゲームの主人公って事ですか？」

そう問い掛けた美奈子の期待を裏切って、小波は「いいえ」ときっぱりと言いながら首を横に振った。

「残念ながら、あなたは主人公じゃないし、そもそもここはゲームじゃないわ」

「はい？」

困惑顔の美奈子を見て、小波は小さく溜息を吐いた。

「ここには時々、あなたみたいな人が来ちゃうのよ。私はそういう人達のお世話も任されてるの。いいこと？ この世界はゲームの世界だけど、実際にここで起こることはゲームじゃないの。ここにいる人たちは皆、ちゃんと生きてるし、それぞれ生活があって、人生があるわ。でも、あなたのいた世界とは少し勝手が違うから、ちゃ

んとそのルールブックは読んでおくようにね？」

「ゲームの世界だけど、ゲームじゃない…？」

美奈子の呟きに、小波が頷いた。

「そうよ。ゲームみたいにセーブもロードもできない。選択肢を間違えても引き返せない。時々その辺を間違える人がいるんだけど、ちゃんと肝に銘じておいてね？」

「き、気をつけます…」

「じゃ、話は以上よ？ 今日家は帰ってしっかりと渡した物を読んでおいてね？ 他に当面の生活に必要なと思われる物は全て、あなたの自宅に揃ってると思うわ」

「はい」

美奈子は返事をしながら立ち上がると、小波から受け取ったものを通学バックにしまいながらふと、頭にある疑問が浮かんた。

「あの…。小波先生？」

「何？」

「一つだけ…。質問してもいいですか？」

「どうぞ？」

美奈子は一つ深呼吸をすると、小波をしっかりと見つめながら尋ねた。

「私は…。私は、元の世界に帰れるんでしょうか？」

美奈子の間に小波はすぐには答えずに、逆に質問で返してきた。

「…帰りたいの？」

「えっ？」

「あなたは、元の世界に帰りたいの？」

小波の間に、美奈子の頭の中に元いた世界での色々な思い出が駆け巡る。生まれた家の事、友人の事、恭平の事…。それらは確かに美奈子の生活で、美奈子の日常だ。

（でも、私はそこに帰りたい…？ あの日常に…？）

溜息ばかりを吐いていた毎日を思い出す。

「私には…」

美奈子の口が微かに動き、小さな声を紡ぎだした。

「まだ、わかりません」

美奈子がそう言うと、小波は困ったように笑った。

「なら、今はそんなこと考えなくてもいいんじゃない？ 杞憂ってものよ？」

美奈子は頭の中で小波が言った台詞を反復すると、うつすらと微笑んで頷いた。

「そうですね。では、失礼します」

「気をつけて帰るのよ？」

「はい」

扉を閉める前に美奈子が再び会釈をすると、小波が微笑みながら胸の前で小さく手を振った。扉が静かに閉じられ、美奈子の足音が徐々に小さくなっていった。

美奈子の足音が聴こえなくなったのを確認すると、小波は自分の机に向かい、PCを開いて何やら打ち込み始めた。

「『桜木美奈子に説明終了』、セーブと」

ふと窓の外を見ると、学園名物の桜の木が満開の花を咲かせていた。

「あの子は、三年後にどんなエンディングを迎えるのかしらね……」
やがて桜並木を通り過ぎる美奈子の後姿が視界に入り、それは桜の木の陰に隠れて見えなくなった。

小波に言われた通り携帯のGPS機能を使って「自宅」と打ち込むと、画面上の地図の上の自宅の位置らしい場所に赤い旗が立った。
「えっと、私はこの青い点だから、この道をとりあえず真っ直ぐ行って、よし！ 大体の場所はわかったわ」

学校の周りは閑静な住宅街と言った雰囲気だ。一軒建ての家々が並び、その合間にアパートやマンションが立ち並ぶ。

（来る時は走ってたから、何にも見えてなかったみたい）

美奈子は周りの景色を注意深く観察しつつ歩いた。

（素敵ない家ばかり。うちとは大違いね。フッフ…）

確かに周りはいいい家が多いが、逆に美奈子の住んでいた町にあるような「生活感」があまり無い。それがこの界限ならではの雰囲気なのか、それともこの世界だからなのか、美奈子にはまだよくわからなかった。

学校から20分ほど歩いたところに、目的地はあった。

「ブルースカイコーポ。ここね」

小波から貰ったレポートの表紙を見ながら建物の名前を確認し、中へと足を踏み入れる。厚いガラスの扉を入ると広いロビーがあり、受付のような所にスーツ姿の中年の男性が一人座っていて、美奈子と目が合うと「お帰りなさい」と笑顔で言ってくれた。

「あ、ただいま…」

ロビーを通り抜け、エレベーターを見つけると、上りのボタンを押す。

（何か、スゴイ所なんですけど、このマンション…）

やって来たエレベーターに乗り込み、5階のボタンを押すと、エレベーターは静かに扉を閉めて動き始めた。

（私の部屋は、503号室ね。えーっと、鍵、鍵…）

美奈子がカバンの中から鍵を取り出すのとほぼ同時に、エレベーターが5階に到着した。

（503は…。あ、あった！）

茶色のドアの横に「503」と刻まれた金色のプレート。その下には「SAKURAGI」と彫られたプレートが付いている。

（間違いないよね？ よし！）

鍵を鍵穴に差し込んで回すと、カチャンという音がして鍵が開く音が聴こえた。ドアを軽く押すと、それは何の抵抗も無く内側に開いた。美和子は恐る恐る中を覗いてみたが、中は暗くてよく見えない。書類やGPS上では「自宅」でも、当の美奈子にとっては、他人の家に無断で踏み込むようなものだ。

（うつ。でも、ここでこうしていても仕方ないし…。えいつ！）

清水の舞台から飛び降りるような気持ちで、美奈子は「自宅」に足を踏み入れた。玄関のすぐ脇に、照明用と思われるスイッチがポウッと暗闇の中で薄明かりを放っている。

（スイッチ、オン！）

目を閉じながら電気を入れ、恐る恐る目を開けると、そこには別に何の変哲も無いマンションの一室があるだけで、美奈子を安堵させた。家具や調度品は新品のものが多く、どれもがスッキリしたデザインの当たり障りの無いデザインの物だが、色が統一されていて洗練された趣があった。

「うわあ、素敵！　こんなところに住んでみたかったのよね〜」

LDKの小さなマンションだが、一人暮らしには丁度いい広さだ。

（つていうか、高校生の分際で、こんな所に一人暮らしつて、いいわけ？）

部屋の中には必要最低限の家具しかないが、それでも台所には一通りの調理器具や、1週間は買い物に行かなくても良さそうなくらいの量の食料品が詰まった冷蔵庫もあるし、自室には美奈子のサイズに合った服がいくつか用意されていた。勉強机の上には、PCもある。

（ここまで用意がいと、何だか逆に気味が悪いわよね…）

美奈子は制服を脱いで適当な私服に着替えると、顔を洗いに洗面所に向かった。そこで初めて、美奈子は「自分」と対面した。

十五歳の自分は、少しあどけなさが残った顔をしていた。

「うわあ…。肌が若いっ！」

美奈子は少し感動しながら、自分の頬を自分の指でプニプニと押してみた。

「すごい。すべすべー。毛穴小さい」

洗面所にはまだ使用されていない感じの洗顔フォームは置いてあったが、化粧水などはどこにも見当たらなかった。

「欲しけりゃ買え、と。そういうこと？　でも、お金、どうしたら

いいんだろ。貰った資料に何か書いてあるかな…」

洗顔後に、美奈子は小波から渡された資料を持ってリビングへと向かった。最初は気付かなかったが、リビングのテーブルの上には銀行の預金通帳、ＡＴＭカード、印鑑、保険証と共に、一枚の紙が置いてあった。紙には銀行の場所と月々の生活費が書いてあり、生活費は毎月１日に自動振込みされる事になっている。家賃と光熱費はそれぞれ支払先に直接振込みになっていて、美奈子が支払う必要はないそうだ。

（天国ですか、ここは…？）

提示された生活費は、一人で一月食べていくには十分な額だ。

（でも、その他に服だの何だのが欲しかったらバイトしろ、と。そういうことね？）

美奈子はそれぞれの物をきちんとしまうと、小波から渡されたレポートから読み始めた。

「桜木美奈子、１５歳。家族構成は両親のみで、その両親は現在、父親の海外赴任でアメリカに滞在中。えーっと、それから…」

レポートの次にルールブックに目を通し終わった頃、美奈子の部屋の玄関のチャイムが鳴った。このマンションは外からのインターホンと、玄関のチャイムは別になっている。誰かが、美奈子の部屋のすぐ外にいる。

「ど、ど、どちら様ですかっ？」

美奈子が震える声を振り絞りながら尋ねると、聞いたことのある声が扉の向こうから聴こえた。

「保健医の小波だけど。晩御飯、一緒に食べない？」

「は？」

美奈子が扉の覗き窓から向こう側を覗くと、そこには保健医の小波潤子が立っているのが見え、美奈子は慌てて鍵をはずしてドアを開けた。

「こ、小波先生！ どうしてここに？」

小波はニッコリと微笑みながら答えた。

「ごめんなさい。言い忘れてたわ。私、隣に住んでるの」
「へ？」

キョトンとする美奈子に、小波は左隣を指差した。

「501号室」

「え、ええー？ 何だ、それなら言っておけばよかったのに！」
「ごめんごめん。すっかり忘れてたから。それでね、夕食、作ったから、良かったら一緒にどうかと思って誘いに来たんだけど」

気が付けば、既に時計は7時を回っていた。時間を確認した途端にお腹が小さくグーツと鳴り、美奈子は顔を赤らめた。

「た、助かります。こんな時間になってたのに、気付きませんでした」

小波はクスクスと笑いながら「そうでしょうね」と言っておいた。
「じゃ、鍵を忘れずに持って来てね？ ここのドア、自動ロックになってるから、鍵忘れて外に出ると管理人さんに開けてもらうまで中に入れなくなっちゃうのよ」

「はい！」

美奈子は自宅の鍵を握り締め、扉を閉めると、隣の小波の部屋にお邪魔した。小波の部屋は美奈子の部屋と違い、女性らしい柔らかな雰囲気にする部屋だった。

「わあ。何か、女性らしいですね、この部屋」

「そう？ ありがとう。そっちはまだ殺風景なんじゃない？ 当面必要な物は全部あると思うけど、欲しい物は頑張っで自分で手に入れてね？」

「やっぱり、その辺はシビアなんですね」

「当然でしょう？ アルバイトは『ドキめも』の大事な要素の一つよ？」

「そうですけど…」

少し膨れっ面になった美奈子を見てクスクスと笑いながら、小波は食卓の用意を整えた。

「わあ、美味しそう…！」

「ありがとう。今日はほら、こっちでの初日でしょう？ 疲れて何も食べなかつたりして、それで体調を壊しちゃったら元も子も無いから。ほら、遠慮しないでドンドン食べて？」

「ありがとうございます！ いただきます！」

食事を始めてから、自分がどれだけお腹を空かせていたのかわかる。それほど、ずっと緊張したままだったのかもしれない。

「ルールブックは読めた？」

食事の後にビールを飲んでいた小波がふと、美奈子にそう問い掛けた。まだ食事をしていて美奈子は口に食べ物が入っていたので、とりあえず首を縦に振って返事をした。それを見て、小波は軽く頷いた。

「そう。…大丈夫そう？」

「はい。とりあえず、生活に慣れたらバイトでも始めます」

「部活はどうするの？」

「残念ながら、私は『ドキめも』の主人公と違って、どの部活でも選べるってわけじゃないもので。運動系はまず、ありえません。私、運動苦手なんです」

肩をすくめながらそう言う美奈子に、小波はニヤリと笑いながら言った。

「そのようね。今朝、かなり息を切らせながら走ってたしね」

「み、見てたんですか…？」

「まあね。毎年、入学式には必ず誰かがこの世界に来ちゃうから、今年はどの子かなって」

小波の台詞の一部が、美奈子には気になった。

「毎年、ですか？」

「そうね、ほぼ毎年」

「毎年、一人？」

「人数は決まっていなわ」

「じゃあ、今年は？」

真っ直ぐな瞳で小波を見つめる美奈子に、小波は少し考えてから、

意地悪そうな笑顔で美奈子を見て言った。

「教えなあゝい」

小波の答え方に、美奈子は一瞬ムツとした。

「ええー。何でですかっ？」

「だって、企業秘密だもの」

「企業？」

「知らないでいた方が、いいこともあるわよ？ あんまりこの世界に深入りすると、私みたいになっちゃうから」

そう言いながらビールを飲む小波を見ながら、美奈子は首を傾げた。

「小波先生、みたいに…？」

「そう」

タン、と飲み干したグラスをテーブルの上に置きながら、小波は言った。

「私がここに来たのは、『ドキめも』がまだパソコン版だった頃よ？」

「え…。えええええっ！ そ、それって…。初期のっ？」

「そう」

自分と同じように、この世界に来た人がいた。それは美奈子にとって心強いことではあった。だが。

「じゃあ、先生は…」

何かを言いかけた美奈子の言葉を、小波が少し悲し気な顔をして遮った。

「そう。それからずっと、ここにいるわ。グッドエンドにも、バッドエンドにもなれずに、ね」

「もしかして、この世界からは帰れない…？」

硬直しながらそう呟く美奈子に、小波は「そういうわけじゃないと思うわ」と言って立ち上がり、キッチンに向かった。追加のビールを持って戻ってきた小波は美奈子に言った。

「戻った人もいると思うわ。少なくとも、全員が全員、ここに私み

たいに残ってるわけじゃないの。ただ、私にはいなくなった人たちが本当に元の世界に戻ったのかどうか、それを確認する術が無いだけ」

小波はビールをコップに注ぐと美奈子にも飲むかと尋ねた。

「遠慮しておきます。ここでは一応、未成年ですから」

「あら、切り替えが早くてエライわ。ま、しっかり頑張りなさい？」
「はい」

美奈子は食器の片づけを手伝うと、自分の部屋に戻ることにした。

「今日はご馳走様でした。美味しかったです」

「どういたしまして。また誘うわ」

「ありがとうございます」

「何かあったら相談に乗るから。学校でも家でも、遠慮無く押し付けて来ていいわよ？」

小波の申し出は、美奈子にとってありがたいものだった。

「助かります。小波先生」

小波は笑顔で頷くと、お休みと言って美奈子を送り出してくれた。

美奈子は自分の部屋に戻ると、大きく深呼吸を一つした。

見たことの無い部屋、見たことの無い家具。それでも、今日からここが自分の家だ。

「ま、ゲームをやっているとって、楽しめますか」

美奈子はベットに入ると、すぐに深い眠りに落ちた。

2話 「2日目」

ピピッ…、ピピッ…。

どこかで電子音が聞こえる。

「うーん」

美奈子は伸びをしながら目を開けると、そのまましばらく固まってしまった。

ピピピッ…、ピピピッ…。

（あ、あれ？　ここは…？）

まだ少し朦朧とする意識の中、美奈子は首を左右に動かして周りを見た。

（ここは、どこ…？　えーっと…）

ピピピピピピピピ…

「だー！」

電子音が鳴り響き、音に耐えられずに、美奈子はとりあえず起き上がってそれを止めることにした。よろよると起き上がってベットから出て、見つけた目覚まし時計を何とか止め、欠伸をしながらリビングに行き、テーブルの上に置かれた冊子や書類が視界に入り、美奈子はようやく昨日のことを思い出した。

（あ、そうだ！　私、『ドキめも』の世界に行っちゃって…）

あれは夢ではなかったのかと思うと、美奈子はガックリと肩を落とした。きつと、心のどこかで昨日のことは全部夢で、目が覚めると元の世界に戻っているものだと思っていたのだろう。

「えーっと、じゃ、学校…。行かなくちゃ、よね…？」

軽い朝食の後、洗面所に向かって覗いた鏡の中には、昨日対面したばかりの15歳の自分がいた。

「やっぱり、夢オチにはしてくれないわけね？　ああ、もう…」

制服に着替え、カバンの中身を確認する。時計を見たら、まだ学校に行くには早い時間だ。

「どうしようかな…。でも、ここから通うのは今日が初めてだし。時間に余裕を持たせていった方がいいわよね？」

丁度その時、美奈子の玄関のベルが鳴り、ドアの向こう側から小波の声が聴こえた。

「おはよう。小波だけど。あなたにはちょっと早い時間かもしれないけど、学校に一緒に行く？」

「あ、はい！ お願いします！」

ここから迷わずに学校へ行くのが少し不安だった美奈子にとって、小波の誘いは渡りに舟だ。

あたふたと慌てながら靴を履き、鍵を持ったことを確認して扉を開けると、そこには少し眠そうな顔をした小波が立っていた。

「おはよう。昨日はちゃんと眠れた？」

「はい。グッスリ眠れました」

「若いつていいわねえ」

小波の言葉に、美奈子が苦笑しながら「そうですね」と答えようと小波は「ふーん」と言いながら美奈子の身体をまじまじと見つめてからニツコリと微笑んだ。

「ま、いいんじゃない？」

本当の年齢を訊かれるかと思って構えていた美奈子は、ちよつと拍子抜けしながら歩き出した小波の後を追った。

二人でエレベーターを待っている間、小波は疑問顔の美奈子を見ながらクスツと笑った。

「私ね、前の世界でのことは、一切訊かない主義なの。だってそんなの、ここでは何の意味も持たないもの」

「…そうなんですか？」

「ええ。まあ、ちよつとは役に立つかな。でもね、前の世界でのことは単なる一知識っていう認識の方がいいと思うわ」

「単なる、一知識…？」

エレベーターの扉が開き、二人は中に乗り込んだ。小波がロビーのボタンを押すと扉が静かに閉じ、エレベーターが下に向かって動

き始めた。

「あなたが向こうで何歳で、何をして暮らしていたとしても、あなたはここでは15歳の高校生なのよ。周りにはあなたを15歳の高校生だと思っているし、そう扱うわ」

「はあ…」

1階に到着したエレベーターの扉が開き、二人はエレベーターから出た。ロビーに差し込む光が眩しく、美奈子は目を細めた。外は今日もいい天気だ。

美奈子は外の空気を思い切り吸い込むと、深呼吸をした。そんな美奈子を見ながら、小波がポンと美奈子の肩を軽く叩いた。美奈子が少し驚きながら小波を見ると、小波は困ったように微笑みながら美奈子に言った。

「まあ、ほら。あんまり深刻に考えない方がいいってことを言いたいよ。あんまり前の世界にこだわら過ぎて、ここで身動きが取れなくなっちゃう人もいるし。要は、考え方の問題かな。普通の人には1度しかない高校生活をもう一度送ることができるのよ？ ラッキーだと思って、満喫しなさいな」

小波の言葉に、美奈子は小さく微笑んだ。

学校の校門を過ぎた辺りで、美奈子は小波と別れた。

（さて。まだ時間があるし…。ちよつと校内を探検してみようかな？）

美奈子はまだ人がまばらな学校の敷地内を少し歩いてみることにした。瑛星学園^{えいせい}高等部は比較的小規模な学校だが、隣接する中等部と共用している施設が沢山あるために、中等部からのエスカレーター組にとっては勝手知ったる部分が多いのだと昨日、同級生のヒカルが言っていた。だが、美奈子にとってはどこも初めての場所だ。

美奈子は高等部の校舎の裏手にやって来た。そこには小さな庭園があり、ベンチなどもあって、休み時間や昼休みにくつろげそうなスペースになっている。花壇には、色とりどりのチューリップが咲

き、他にも色とりどりの花々で賑わっていた。

「うわぁ、可愛い…！」

美奈子はベンチの一つに腰掛け、花壇の花々を眺めた。日差しが暖かく、どこから甘い香りも漂ってくる。

（ここ、落ち着くな…。いい場所見つけたかも）

美奈子が空を見上げながら深呼吸をすると、自然と笑みがこぼれた。

（気持ちいい）

その時、クスクスと言う笑い声がどこからか聴こえた。

「随分、気持ち良さ気だね。君、新入生？」

美奈子がキョトンとしたまま首を傾げていると、突然、美奈子の視界が男性の顔で埋まった。

「…！」

突然のことに息を飲みながらギョツとしている美奈子の反応を見て、その人は堪えきれずに笑い始めた。

「…プツ。あはははは！」

（だ、誰、この人…？）

美奈子の目の前で、高等部の制服に青いネクタイをした男性がお腹を押さえながら笑っている。

「あ、あの…」

恐る恐る声を掛けると、彼は「ご、ごめん…。今の、ツボった…」と言いながら何とか息を整えた。

「あー、お腹がまだ痛いよ。君が意外にも素直な反応するから…」
体勢を整えて美奈子に向かって微笑みかけたその人は、スッキリとした整った顔立ちをしていた。いわゆる美形、というやつだ。

「えーっと、青ネクタイってことは、先輩…ですよね？」

「そう。僕は2年の白沢しろさわ。白沢学まなびがく。ここでは割と有名だと思うから、覚えておいて？」

「はあ…」

（自分で自分のこと、有名って言ったわ、この人…）

ここでは有名ならしい白沢先輩は、フレームがブランド物の眼鏡を掛けたクールな印象を持つ人で、いかにも見た目が「優等生」っぽい。割と背が高く、痩せ身だがヒョロっとした感じではない。

（「ドキめも」で言うと、優等生で温和で優しくて世話好きな人が、逆に優等生なんだけど腹黒なのか…。どっちだろう？）

そんなことを考えながら白沢を眺めていた美奈子の視線をどう受け取ったのか、白沢は美奈子に向かってニヤツと微笑むと、顔を美奈子の耳元に近づけて囁いた。

「何？ 僕に興味を持った？」

白沢の息が耳に少しかかり、美奈子は反射的に白沢から後ずさった。

「そ、そういうんじゃない、ありません！」

耳を押さえながら真っ赤になっている美奈子を見ながら、白沢はクスッと笑って少し長めの前髪を掻き上げた。

「君、名前は？ クラスはどこ？」

「い、1年A組の、桜木です」

「桜木、何ちゃん？」

白沢の問に、美奈子は少し警戒しながら上目遣いで答えた。

「美奈子、です」

「そう。美奈子ちゃんか…。名前も可愛いね。ところで君、携帯持つてる？」

唐突な問に、美奈子は少し呆気に囚われながら答えた。

「持ってます、けど…？」

美奈子の答えに頷きながら、白沢は制服のジャケットの内ポケットから自分の携帯を取り出した。

「オッケー。じゃ、君の番号とメアド、僕にくれるかな？」

「…何故ですか？」

正直に問い掛ける美奈子に、白沢は意地悪そうな微笑を浮かべながら美奈子ににじり寄って来た。美奈子の肩が硬直する。

「美奈子ちゃん？ 先輩の言うことは、大人しく聞くものだよ？」

ほら、君の携帯を出してごらん…？」

（こ、怖い…。この人、絶対に腹黒のほうだ！）

美奈子は渋々とカバンの中から携帯を取り出した。携帯を開いてパスワードを入れたところで、携帯がスッと美奈子の手の中からすり抜け、白沢に取られた。白沢は右手に自分の、左手に美奈子の携帯を持ちながら、両方の携帯を涼しげな顔をしながら操作している。

「はい、赤外線通信」

「うつつ」

ピピっという発信音が聴こえた。その後、白沢がお互いの顔写真をそれぞれの携帯で撮り、さらに両方の携帯を操作して美奈子に美奈子の携帯を返した。

「はい、登録終了。僕の番号は登録番号1だから。変更しちゃだめだよ？」

「何、人の携帯を勝手に操作してるんですかつ」

「そんなに嫌そうな顔、しないの。ちょっとしたサービスだよ。僕の番号を欲しい子なんて、ここには沢山いるんだから、光栄だと思わなきゃ」

「…そうなんですか？」

「ああ。ま、理由はそのうちわかるよ」

「へー」

心のこもっていない美奈子の相槌に、白沢は片眉を上げた。

「…信じてないね？」

「半分くらいは」

白沢は一瞬ムツとしたような顔をしたが、すぐにニヤッと不敵な笑みを浮かべながら制服のポケットから一枚の長方形の紙を取り出して美奈子に渡した。

「これ、あげるよ」

「…ライブハウスのチケット？」

「そ。再来週の金曜日。僕らの出番は、多分10時くらいだから」

ニッコリと微笑む白沢とバンドが美奈子の頭の中で上手く繋がら

なかった。

「先輩、バンド活動をされてるんですか？」

「意外？」

「はい」

間髪入れずに答えた美奈子に、白沢は一瞬、面食らったような顔をしていたが、すぐにクスクスとわらって言った。

「本当に美奈子ちゃん面白いねえ。あ、それとも、この街に来たの最近なの？ これでも僕らは、この界限では結構知られてきてるんだよ？」

「へー」

美奈子の疑いの籠った返事に、白沢は溜息を一つ吐いた。

「まだ、信じてないね？」

「全く」

美奈子の答えに、白沢は眼鏡をグイッと上に押し上げながらニヤリと微笑むと、美奈子に顔を近づけた。白沢の息が美奈子の顔にかかりそうな距離に、美奈子は全身を硬直させた。

「では、これは先輩からの命令だ。君はこの日、とにかく必ずこのライブハウスに来ること。もう一枚チケットをあげるから、誰か可愛い友達を誘っておいで」

「お、男の子でもいいですか？」

美奈子の問に、白沢は眉間に皺を寄せながら答えた。

「女子限定に決まってるだろう？」

「はぁーい」

美奈子が上目遣いに渋々チケットを受け取りながら返事をする、やっと白沢の顔が美奈子から離れ、美奈子は安堵の息を漏らした。

校舎の方が徐々に騒がしくなってきた。登校して来た生徒が増えたのだろう。

「ああ、もうこんな時間か。君ももうそろそろ行かないと、ホームルームに遅れるよ？」

「先輩だって、そうなんじゃありません？」

「そうだね。じゃ、僕は先に行くよ。またね、美奈子ちゃん」
ニッコリと微笑みながら立ち去る白沢の後姿を見送った後、美奈子は昇降口へと駆け足で向かった。

美奈子が教室に入ると、ヒカルが美奈子を見つけて駆け寄ってきた。
た。

「ミナちゃん！ あなた、さっき白沢先輩と庭園で話してなかった？」

「うん。何だ。見てたんなら、声掛けてくれれば…」

よかったのに、と言い掛けた美奈子の声を、ヒカルの声が遮った。
「きゃあ〜！！ やっぱり！ いいなあ、ずるいなあ、白沢先輩と二人でお話だなんて〜。しかも、あんなに近くで〜。で、何話したの？ ね、ね？」

「な、何…？ ヒカルちゃん、白沢先輩のこと好きなの…？」

美奈子の間に、ヒカルは「いやあ〜ん」とピンク色の声を出しながら身をよじって赤面している。

「そういうんじゃないって、えーっと、懂れって言つか…。アイドルっていうか…。この学園じゃ、白沢先輩を知らない女の子はいないわよあ〜」

「私は知らなかったけど？」

平然と答える美奈子の肩をヒカルが力いっぱい叩いた。

「やつだあ〜、もう〜。そりゃ、ミナちゃんはここに来ただけだから、仕方ないよあ〜」

「そう、なんだ…」

ふと気付くと、教室内のエスカレーター組女子が全員、美奈子たちの一言一句を聞き逃すまいとしているのが見えた。

（こ、コワ！）

「で？ 先輩とは何を話したの？」

「え？ あ、別に…。私が花壇を眺めながらボーっとしてたら、『気持ち良さ気だね〜』って声を掛けられただけよ？」

美奈子のその言葉に、教室中のエスカレーター組女子が「ああ」とか「ほ〜」とか「羨ましい」とか言っている声が聴こえた。

「それだけ？」

何かを期待しながらキラキラした瞳で尋ねるヒカルを前に、美奈子はライブチケットの話をするかしまいかで悩み、結局チケットのことは言わずに黙っていた。

隠し事をしたかったわけではない。ただ単に、あの場でその事を言ったが最後、クラス中のエスカレーター組女子から一斉攻撃を浴びそうな嫌な予感がしただけだった。昔から、美奈子のこの手の予感によく当たる。

（どうしたらいいのかなあ……。でも、行かないと、それはそれで先輩から後で闇討ちとかされそうな嫌な予感もするし……）

美奈子の頭の中で、既に白沢は「黒いキャラ」として定着してしまっていた。

その時、教室の扉が開き、金平が入ってきた。

「席に着きなさい」

教室の中から話し声が消え、各自が席に着くと静寂が訪れた。

「おはよう、みんな」

金平の挨拶に、全員が揃って挨拶を返すと、金平は満足気に頷いた。

「よし。では、出席を取る。青木」

「はい」

昨日と違い、返事があった。だが、声の主がいるはずの席は空だ。（あれ？）

美奈子が首を傾げていると、長身の男子生徒が一人、後ろの扉から平然と入って来て空いていた席に座った。教室の中が少しざわめく。

「ギリギリセーフだな、青木。もう少し早く来てくれるとありがたいんだがな」

苦笑しながらそう言う金平に、青木と呼ばれた男子生徒は特に何

の感情も見せずに「努力はします」とだけ答えた。

出席の点呼の間中、自分の席から窓の外を眺めている青木は少し長めの髪が横顔を覆ってはいたが、割と端正な顔立ちをしていて、独特の雰囲気を持った少し印象的な少年だった。頼杖を突きながら窓の外を眺める姿が様になると言うか、絵になる。

（絵…？）

美奈子は「あれ？」と思いながら青木を見た。青木は相変わらず午後の新入生歓迎会について話している金平を無視して窓の外を眺めている。

（あの雰囲気。どこかで…。えーつと…。ああっ！」

美奈子は思い出してハッと息を飲んだ。

（あの人も、ドキめも3の攻略対象じゃない？）

美奈子は教室を少し見回した。

（緑山君、青木君。あ、あと、ヒカルちゃんの友達の赤井君！彼

もそうかも！ これは偶然なの…？ それとも…）

小波は昨日、美奈子に告げた。美奈子はドキめも3の主人公ではないのだと。だとすると。

（いるんだわ、きつと…。このクラスの中に、ドキめも3の主人公が）

昼休みになり、美奈子はヒカルと一緒に学園のカフェテリアにランチを食べに行くことにして廊下を二人で歩いていた。

「カフェテリアも中等部と共有なんだけどね、なかなか充実してるんだよ」

「そうなんだ。楽しみ」

「おーい。ヒカル」

二人の後ろから声がして振り向くと、そこには同じクラスの赤井健太が緑山剛と一緒にカフェテリアに向かって歩いているところだった。

「あ、健太！ 健太たちもカフェテリアでランチ？」

「そ。お前らも行くんだつたら、一緒に食おうぜ」

健太の誘いに「いいかな？」と言う顔をして美奈子を見るヒカルに、美奈子は「そうしようよ」と笑顔で返すと、ヒカルは「オツケー」と明るい返事を男子に返した。

カフェテリアはまるでファミリーレストランのようで、充実したメニューに美奈子はどれを選んでいいのか随分と迷い、結局ヒカルの勧める「スター定食A」に決めた。

「結構、ボリュームあるわね」

「でしょ？ 私はペロツと食べちゃえるけど、食べ切れなかったらさ、ほら、ここに2人、残り物を処理してくれる人たちがいるし」

ヒカルがそう言つて健太と剛を指差すと、2人とも「おう、任せとけ」と言つて笑つた。

「そう言えば、桜木さんは部活はどうするんだ？」

剛からそう訊かれて、美奈子は「うーん」と言いながら両腕を胸の前に組んだ。

「まだ、わからないの。とりあえず、今日の午後に新入生歓迎会があつて、部活の紹介とかもあるんでしょ？ それ見てから候補を絞つて決めるわ」

「うんろーへー？」

おかずのトンカツを頬張りながら尋ねる健太に、美奈子は笑いながら答えた。

「運動系には見えないでしょ、どう見ても。私、運動苦手なの」

「へー。ミナちゃん、運動ダメなの？ ざーんねん。私、バスケットに誘おうかと思つてたのにいゝ」

ヒカルが残念そうな声を出した。

「ヒカルちゃんはバスケなんだ？」

「うん！ 中等部からずっと続けてるから、そのままやろうと思つて。先輩達のこと知ってるから楽だし。健太もどうせ、サッカーでしょ？」

「おう」

「緑山君は？」

ヒカルの上に、剛がバレーボールのスパイクのジェスチャーをしながら答えた。

「俺はバレー部。前の中学でもやってたんだ。これでも、中学の時は県大会まで行ったんだぜ？」

「へえー。皆、運動系なんだね。青春してるなあ……」

美奈子が感心しながら言うと、ヒカルが笑いながら言った。

「ミナちゃん、何か口調がおばさんっぽいよ？」

ヒカルの突っ込みに、美奈子は飲みかけの水を噴出しそうになっ
てむせた。

（うつ。しまった！）

「ケホッ！ そ、そお？ わ、私は、何か自分に出来そうな部活を
探すよ、うん。それに、バイトも探さなくちゃいけないし」

「バイト？」

少し驚いて美奈子を見る三人に向かって、美奈子は微笑みながら
頷いた。

「うん。うち、今両親が海外で、月々の生活費が決まった額しかな
いでしょ？ 欲しい物はバイトしてねって言われてて。この学校、
幸いバイト禁止じゃないみたいだし」

美奈子の言葉に、ヒカルが感心したように頷いた。

「まあねー。私も高校生になったから、バイトもやってみたいけど
……。当面は部活に燃えるかなあ……」

「そうだな。部活やって、それでもバイトできる余裕があるかわか
んねーし」

健太の言葉に「そうだよな」と剛が同意する。

「勉強もあるしねえ……」

ほう、と4人が同時に溜息を吐いた。

少しの沈黙の後、ヒカルが目の前ジュースのストローをいじり
ながら口を開いた。

「ミナちゃん、知ってた？ この学校、試験の順位を学内に張り出

すんだよ。今時、信じられる？ 人権侵害だよな」

美奈子は『ドキめも』恒例の試験結果のイベントを思い出しながら頷いた。

「あ、そう言えば、そうだね」

「？ 知ってた？」

「！！ え、えーっと、そんなことを誰かから聞いたと思う」

（危ない、危ない。『ドキめも』イベントでそうだよなとか、言えないんだっ！）

「桜木って、ボーっとしたり、ハツとしたり、何か七面相で見てて飽きねーよな」

健太の言葉に、思い出したように剛が言った。

「そう言えば、昨日、桜木さんはどこから来たわけ？」

「えっ？」

「ほら。俺らが会った時。あの時、桜木さん、落ちてきたじゃん」

何気なくそう言った剛の言葉に、ヒカルと健太は両目を大きく見開きながら口を開いたまま固まっている。

「お、お、落ちてって…？」

「おいおいおい。何だよ、それ…」

啞然とする二人に、剛は平然と「こう、空からさ…」とかジェスチャーまで交えて話している。

「ちょ、ちよっと、緑山君！ それは、えーっと…」

（ど、どうしよう…）

困惑している美奈子の気も知らずに、ヒカルと健太は剛に「何？ どういうこと？」などと訊いている。

（やーめーてええー）

知らず知らずのうちに頭を抱えながら俯いてしまった美奈子に気付いたヒカルが、美奈子に悪いと思ったのか「ま、まあ、何か事情があったんだよね？」などと言って取り繕っている。

「あ、悪い。俺、何か言っちゃいけないこと言ったか？」

剛の優しい声が聴こえて美奈子が顔を上げると、心配そうな顔を

した剛と目が合った。

「あつ。えーっと。ううん。気にしないで？　っていうか、あのことは忘れて？」

美奈子が無理に笑みを浮かべながらそう言うと、剛が少し赤い顔をしながら「あー、うん。わかった」と言っただけでジュースを飲んだ。

午後の新入生歓迎会はなかなか楽しいイベントで、各部活の先輩達があの手この手で1年生の興味を引こうと頑張っていた。

「ミナちゃん、どこに見学に行くか決めた？」

「うーん。料理かなあ…。そのくらいしか私、取り得ないし」

自信無さ気に美奈子がそう言うと、ヒカルが笑顔で言った。

「ミナちゃん、お料理できるの？　さすがだね！　私はお菓子作ったりするのは好きなんだけど、ついにこの間、お母さんから家の台所の使用禁止令が出されちゃってさ」

「へ？」

キョトンとした顔をしている美奈子に、ヒカルがいたずらっ子のように笑った。

「あのね、春休みの間に、暇だから家でクッキー焼こうとして台所燃やしそうになっちゃって。クッキーをオーブンに入れたの忘れたまま、ゲームに熱中しててさー。気が付いたらこう、な〜んか焦げ臭いな〜って」

「ああ、なるほど」

「料理部で何かお菓子とか作ったら、お裾分けしてね！」

「うん」

「やった！」

無邪気に笑うヒカルが、美奈子には何故か羨ましかった。

（いいわね。未来に何の不安も無くて、毎日が楽しくて…。私もあの頃は、こんな感じだったのかな…？）

ただ、自分の好きなことに熱中して、悩みがあってもそれは恋愛だったり、勉強だったり…。些細なことで一喜一憂していた、あの

頃…。

「ミナちゃん、大丈夫？」

「え？」

ヒカルの声に気付いて顔を上げると、ヒカルが少し心配そうな顔をして美奈子を見ていた。

「あ、ごめん。何か言った？」

美奈子の言葉に、ヒカルはうつんと言って首を横に振った。

「何でもない。ただ、ミナちゃんがちょっと寂しそうだったから。やっぱり、一人暮らしは寂しいのになって…」

美奈子には、ヒカルの何気ない思いやりが嬉しかった。

「そうじゃないの。ちょっと、楽しそうなヒカルちゃんが羨ましかっただけ」

「楽しそう…？ うん。私は楽しいよ？ ミナちゃんは、楽しくない？」

美奈子は微笑みながら答えた。

「…楽しいよ？」

「そう。なら、良かった！ あ、ミナちゃん、今日時間ある？ あるなら、今日は私、放課後暇だから街を案内できるよ？」

「じゃ、お願いしようかな」

「よし、じゃ、レッツゴー！」

少女達が笑いながら通り過ぎていくのを、小波は保健室の窓から微笑みながら眺めていた。

その日、ヒカルは美奈子をおおぞら駅の駅前にあるショッピングモールや商店街に連れて行ってくれた。ショッピングモールの中には映画館やゲームセンターなどもあり、いつか週末に遊びに来ようと約束して、その日は別れた。

「えーっと、ここから家に帰るには…」

電車通学のヒカルと駅前で別れた後、美奈子は携帯を開いてGPS機能を使って自宅の位置を確認していた。

「うん。こっちな」

地図を頭に入れて、美奈子は歩き出した。

（ついでにちよつとそのスーパーでちよつと買い物しておこうかな…）

美奈子が駅前のスーパーに足を踏み入れようとした時、後ろから聞き覚えのある懐かしい声が聴こえた。

「桜木さん…？」

後ろを振り向くと、そこには私服姿の桃川祥子が立っていた。

「あ、桃川さん」

美奈子の言葉に、祥子が安堵したように微笑んだ。

「よかった。私の名前、覚えてくれたのね？」

祥子は笑顔で美奈子に近付いてきた。

「桃川さんこそ」

「私は人の顔と名前を覚えるの、得意なの」

「そうなんだ。私はまだ、クラスメートの半分くらいの顔と名前が一致しないの。桃川さんが羨ましい」

二人はお互いの顔を見合わせながらクスツと笑った。

「これから買い物？」

「うん。ちよつと、足りない物を買っておこうかと思って」

「私も。一緒にいい？」

「うん。どうぞ？」

二人は店の中に入るとそれぞれ買い物カゴを手に、店内を歩き始めた。

「桜木さん、まだ家に帰ってなかったの？」

ふと、祥子が制服姿の美奈子に尋ねた。

「うん。放課後にヒカルちゃんが駅前を案内してくれてたの。私、ここに越してきたばかりだから」

「え？ 桜木さんって、違う街から来たの？ 私、あなたが藤寺さんと仲がいいから、てつきりあなたも中等部からのエスカレーター組なんだと思ってた」

驚いた顔で美奈子を見る祥子に、美奈子は首を横に振りながら答えた。

「違うわ。私は瑛星は高校からの。でも、ヒカルちゃんとは不思議と気が合うつて言うか」

「そう…。羨ましいわ。私にはまだ、友達がいらないから」

「え？」

美奈子は休み時間の教室の様子を思い返してみた。そう言えば、祥子は必ず誰かと一緒にいるが、その誰かはいつも違う人達だったような気がする。

「あ、桃川さんも、高校から瑛星なの？」

美奈子の問に、祥子は黙って頷いた。

「何だ。じゃ、私達、同じなのね」

「ふふ。そうみたい」

二人は顔を見合わせて笑った。その瞬間は美奈子を少し懐かしいと思わせると同時に、切ない気持ちにさせた。

「桜木さんの家はこの近くなの？」

「えーっとね、ここと学校の中間くらいかな。桃川さんは？」

「私の家はここから割と近いの。だから今も、お母さんに調味料足りないかもしれないから買って来てつて使われてるんだけど。えーっと、あとは、ゴマ油かな…」

祥子は手に持った小さなメモと買い物カゴの中身を確認している。美奈子は少し長くなりつつあるレジの列を見ながら、祥子に告げた。

「私はこれで終わりだから、先にレジに並んでるね？」

「あ、桜木さん」

レジに向かおうとした美奈子を祥子が呼び止めた。

「何？」

「あの、途中まで一緒に帰らない？」

美奈子には、断る理由が何も無かった。

「うん。いいよ。じゃあ、出口の所で待ってるね」

美奈子の言葉に、祥子が嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう！　じゃ、私もすぐに追いつくから！」

そそくさとゴマ油を探しに行った祥子の後姿を見ながら、美奈子はクスツと笑った。

（何か、ああいうところは祥子っぽいな…）

彼女が祥子なのか、それともただ単に祥子に似た同姓同名の人物なのかは、美奈子にはまだわからない。それでも、彼女の存在は見知らぬ世界に飛ばされた美奈子を安心させてくれる。

（ヒカルちゃんは私に元気をくれるけど、祥子は昔に戻ったみたいで何だか落ち着くな…）

レジで会計を済ませ、出口の近くの雑誌コーナーでパラパラと雑誌を立ち読みしていると、祥子が買い物袋を下げてやって来た。

「ごめん。おまたせー」

「ううん、そんなに待ってないよ。じゃ、行こうか？」

「うん」

二人は通勤帰りの人々で混雑し始めたスーパーを後にした。外はすっかり日も落ちている。

「うわ。遅くなっちゃったかな。お母さん、怒ってるかな」

祥子がそう言いながら夜空を見上げた。睫毛の長い横顔は、美奈子が昔、眺めるのが好きだったあの横顔だ。

「し…。桃川さんは、兄弟とかいるの？」

元の世界の祥子には、姉と兄が一人ずついたと記憶していた。

「うん。弟が一人。これがまた、色々とうるさいんだ」

元の世界の祥子の家族設定と違うのを知り、美奈子は少し安堵した。

（やっぱり。彼女は私の知ってる祥子とは違うんだ）

「どうかした？」

黙ってしまった美奈子を気遣うように、祥子が問い掛けた。美奈子は慌てて首を横に振る。

「あ、ううん。でも、賑やかそうでいいね」

「賑やかは賑やかだけど…。そういう桜木さんは？　家族は？」

「私は一人っ子。両親は今、二人ともアメリカに行ってるのよね」
美奈子の言葉に、祥子が大きな目の眼をさらに大きくして驚いていた。

「ええっ？　じゃあ、桜木さん、今、一人暮らしなの？」

「うん」

「そっかー。大変だね」

「そうかな？」

「だって、家事とか洗濯とか、全部自分でやるんでしょ？」

「まあね。でも、一人だから手抜きでもオッケーだし」

「あ、そっか」

「うん」

いつの間にか、二人は分かれ道まで辿り着いていた。

「あ、じゃあ、私はこっちだから」

「うん。じゃ、また明日」

二人はお互いに手を振りながら、別々の道へと歩き出そうとした。

「桜木さん！」

不意に、美奈子の後ろから祥子の声がした。美奈子が驚いて振り向くと、祥子が分かれ道の角に立ち、こちら側を見ていた。

「何？」

美奈子が尋ねると、祥子は少し考えてから口を開いた。

「あ、えっと……。そうだ。明日、お昼一緒に食べない？」

「ヒカルちゃんと一緒でもよければ、喜んで。学食でもいい？」

祥子は笑顔で頷く。

「うん。あ、あと、携帯の番号とメアド、教えて？」

「あ、うん。いいよ」

二人はお互いの連絡先を交換し合った。美奈子のアドレス帳に、エントリーが増えていく。一番最初に入っている「白沢学」の文字を見て、美奈子は今朝の出来事を思い出して苦笑した。

「どうしたの？」

美奈子の顔を不思議そうに見ている祥子に「何でもない」と言い

ながら、美奈子は今朝、白沢から貰ったライブのチケットのことを思い出した。

「唐突で悪いんだけど、桃川さん、再来週の水曜日の夜って、暇？」

「再来週…？ 何かあるの？」

「うん。白沢先輩に今朝、先輩がやってるバンドのライブチケットを2枚貰ったの。『可愛い女の子を連れて来い』って言われちゃったんだけど…。良かったら一緒に行かない？」

「か、可愛い女の子…？ 私でいいのかな？」

「十分過ぎるでしょ？ で、先輩達のバンドは夜10時くらいからって言うてた」

「10時か…。結構遅い時間なんだね。ちよつと今晚、親に訊いてみるね？」

「うん。じゃ、また明日！」

「またね」

祥子の姿が角から見えなくなると、美奈子は自宅に向かって歩き始めた。

自宅に戻って軽く夕食を済ませた後、美奈子が携帯をチェックすると、何件かメールが入っていた。一つはアメリカに行っているという「両親」から無事に入学式が終わったかというメール。ヒカルからは今晚8時からの笑い番組が面白いから見てみてと言うメール。その次に祥子から再来週のライブの件は大丈夫だというメールが入っていた。

（あ、良かった。でもこれ、クラスの女子に知られるとうるさいだろうな）

美奈子は祥子への返信に「クラスの女子（ヒカルちゃんも含む）には、チケットのことは内緒にしておいてね」と書いて送った。

すぐに祥子からは「了解！（^o^）／」というメールが返ってきた。

祥子からの返信メールを見ながら、美奈子は微笑んだ。

(何か、楽しくなってきたな)

その時、美奈子の携帯が新着メールの着信を伝えた。

「ん？」

メールは白沢からだった。

『From: 白沢学』

美奈子ちゃん、おやすみ (^ * ^) 』

「こ、この顔文字は、『チュ』ってこと...? 何これ」

美奈子が床に転がりながら笑っていると、携帯が鳴った。

「も、もしもし...? あはは」

「『あはは』って何？」

白沢だ。

「あ、先輩。先輩のメール、ウケました...」

「失礼だな。僕が大サービスで打ってやったあのメールに、返信もしないで爆笑かい？」

「返信しようと、思っていましたよ？ でも、あれを超えるのは無理です...」

携帯の向こうで白沢の溜息が聴こえた。

「別にウケ狙いじゃないから。それに、無理なら態度で示してみれば？」

「は？ 態度、ですか？」

「そ。明日も朝、今朝くらいの時間に同じ場所において」

「ええー」

美奈子は今朝、クラスの女子が大騒ぎしていたことを思い出した。

「何？ 嫌なの？」

追い討ちをかけるように、白沢の声が棘を帯びる。

「嫌って言うか...。クラスの女子に先輩のファンが多くて大変なんですよ、私...」

美奈子の言葉に、受話器の向こうからクスッという声が聴こえた。

「だから言っただろう？ 僕は有名だって」

「そうでしたね」

軽く受け流す美奈子の返事を聞いて、受話器から白沢の溜息が聴こえた。

「ふう。君って子は、全く…。それで、一緒に行く相手は決まったの？」

「あ、はい。クラスメートの女の子と一緒にいってくれるって…」
「そう。可愛い子？」

白沢の間に少し呆れながら、美奈子は自信満々に答えた。

「その辺は、バッチリです。御期待に沿うかと」

「でかした。じゃ、君の働きに免じて、明日の朝は免除してあげよ。また連絡するね」

「はあ」

美奈子の気の無い返事に、白沢が呆れたような声を出した。

「…あのね。そこは『はい、先輩。私、待ってます（ハート）』だろう？」

「その、『（ハート）』って、何ですか？」

「その位のサービスはしろよ。この僕がせっかく電話掛けてやったんだから」

白沢の言葉に少しムツとしながら美奈子が言う。

「全く意味がわかりませんよ」

向こうも怒らせたと思ったのか、白沢は少し優しい声になって言った。

「…僕が聴きたいだけ。頼むから、言ってごらん？」

（何だかなあ、もう…）

美奈子は諦め半分で深呼吸をして、携帯を持ち直した。

「はい、先輩。私、待ってます」

「…（ハート）は？」

「そのサービスにはお応えしかねます」

受話器の向こうから、不満な音が聞こえたが、美奈子にはよく聞き取れなかった。

「ま、今日はこのくらいでいいか。じゃ。おやすみ」

「おやすみなさい」

電話が切れた。

「…何だかなあ、あの人は。変な人と出会っちゃったな」

ふと、携帯の文字が美奈子の目に入る。着信履歴の一番上に、「白沢学」。それと同時に、美奈子は『ドキめも3』の登場人物を思い出した。

「ああ！ 白沢先輩も、ひょっとして攻略対象？ これって、何かの偶然？ それとも…」

美奈子は悶々としたままベットに入り、いつの間にか眠りに落ちていた。

3話 「入部」

翌日の昼休み。

約束通り、美奈子は祥子を誘ってヒカルと3人で昼食をとり、学校のカフェテリアへと向かっていた。

「ミナちゃんは、今日の体験入部は料理研究会に行くんでしょ？」

桃川さんは？

ヒカルの間に、祥子はニツコリと微笑みながら答えた。

「私はテニス部に行ってみようと思ってるの。藤寺さんは？」

「私はバスケ。中等部からバスケなの」

「あ、そっか。藤寺さんは中学も瑛星^{えいせい}なのね」

「うん！」

カフェテリアに入り、それぞれ好きな物をトレイに乗せて会計を済ませると、3人は窓側の日当たりのいい場所にあるテーブルを選んで腰掛けた。

「桃川さんは、テニスはずっとやってたの？」

ヒカルが尋ねると、祥子はサンドイッチを頬張りながら頷いた。

「うん。小学校の高学年からね。でも、ずっと軟式テニスだったから、今回、硬式は初めてなの」

「軟式と硬式？」

キョトンとした表情の美奈子が尋ねると、祥子が頷いた。

「そう。基本的なルールは同じだけど、ボールとラケットが違うから、打ち方が少し違うの。とは言っても私、まだ硬式を実際にやったことないから、どんな風に違うんだか、あんまりよくはわからないんだけど…」

「へえー。面白いね」

ヒカルはそう言いながらジュースを飲んだ。

「私はスポーツってあんまりやらないから、よくわからないかなあ」
美奈子がそう言うと、ヒカルが笑った。

「大丈夫、大丈夫。逆に、私は薄力粉と強力粉を間違える女だから」
「えっ？ ヒカルちゃん、それはスゴイよ…？」

「でも、両方とも小麦で出来た粉じゃん？」

「悪びれずに答えるヒカルを見て、美奈子は祥子と目を見合わせて笑った。」

「あはは。藤寺さんって、面白い」

「ヒカルちゃん、やっぱりバスケ部で正解だね」

「もー。二人とも、笑い過ぎだつてば！」

「ごめん、ごめん」

「何か、楽しそうじゃん、美奈子ちゃん」

不意に後ろから声がして美奈子が振り向くと、そこには白沢学しらいわまなぶがもう一人の2年生男子と一緒に立っていた。

「あ、白沢先輩、こんにちは。今日は学食ですか？」

「うん。『今日は』って言うより、『今日も』が正解けどね。僕、ほぼ毎日ランチはここで食べてるから。気付かなかった？ それより美奈子ちゃん、何食べてるの？」

「私は今日はカツサンドです」

「へー。美味しそう。一口試してもいい？」

「はあ？」

美奈子の返事を待たずに、白沢はカツサンドを持っていた美奈子の右手首を掴むと、それを自分の顔に近づけ、美奈子の食べかけのカツサンドを一口頬張った。

「うっそおおおおお！」

「きゃあああああああ！」

白沢の様子を伺っていた周りの女生徒達から金属音のような悲鳴が湧き起こった。

「し、し、し、白沢先輩！」

「ん？ うん。やっぱりこのカツサンドは美味しいね」

「いや、そうじゃなくて…」

「何？ ジュースもくれるの？」

「いい加減にしておけ、学」まなぶ

白沢と一緒にいた先輩が口を開いた。

「何だよ、武士」たけし。ちよっと味見させてもらったただけだろう?」

悪びれる様子も無く答える白沢に、武士と呼ばれた先輩が呆れたと言った表情で溜息を吐いた。

「何が味見だよ。お前、このメニューはほとんど食い尽くしてるだろ? お前も男だったら、相手が困るようなことはするな」

「相変わらず固いねえ、武士ってば。あ、美奈子ちゃん。こいつは黒田武士。僕のクラスメート」

「あ、初めまして、黒田先輩。1年の桜木美奈子です」

椅子から立ち上がって会釈をする美奈子と目が合った黒田は、興味無さそうにツイと視線を美奈子から反らして白沢に「行くぞ」と合図を送った。

「はいはい、わかったよ。あ、でも最後に一つ、美奈子ちゃんに質問」

「はい?」

首を傾げる美奈子の耳元に顔を近づけた白沢が、美奈子の耳に囁いた。後ろの方から女生徒達の「いやああああ」という絶叫が聴こえる。

「ねえ。どの子と一緒にライブに来るの? 右の子? それとも、左の子?」

白沢の息が耳にかかり、美奈子は肩をすくめて白沢から身体を引きながら小さな声で答える。

「ひ、左の子、です…」

美奈子の言葉に、白沢がチラッと祥子を見た。祥子は何事かと首を傾げながら二人を見ている。

「グッジョブ。じゃ、またね」

白沢が黒田と一緒にカフェテリアを去った後、その場にいた他の女生徒達の視線が居たたまれなくなって、美奈子たちは食べ物を急いで掻き込むと、そそくさとカフェテリアを離れた。

「なーんか、ミナちゃん、白沢先輩と親密」

余った休み時間で裏庭をブラブラと歩きながら、ヒカルが言った。
「耳元で内緒話とかしちゃうって、なーんか、やーらし」

「あ、あれは、その、ちょっと頼まれ事をしてたというか……」

美奈子の必死の弁解も、白沢ファンのヒカルには効かないらしい。
「えー？ 昨日の今日で？ ずるいな。私なんて、中等部の頃から先輩のこと知ってるのに……」

ブーブーとブーたれているヒカルを見ながら美奈子が肩をすくめていると、祥子が美奈子の制服の裾を引っ張りながら、小声で美奈子にしか聴こえないように囁いた。

「ねえ、桜木さん」

「ん？」

美奈子が祥子に顔を向けると、祥子がさらに小声で囁いた。

「例の。ヒカルちゃんが行った方が、良くない？」

祥子が気を遣うのがよくわかったが、白沢から直に貰ったチケットをヒカルに渡したりしたら、今以上にヒカルが拗ねてしまうだろう。

「でもさつき、桃川さんと行くって言っちゃったし。桃川さんだつて、せっかく御両親にOK貰ったんだから。そんなに気にしなくても、大丈夫よ」

「でも……」

「なーに？ 二人で何話してるの？」

不意にヒカルに聞いただされ、二人はバツとお互いから離れた。

「何よお。内緒話？」

「えっと、ほら、白沢先輩と一緒にいた先輩もカッコよかったねって、言ってたの」

美奈子が慌ててそう言うと、ヒカルは「何だ」と言う様な顔をした。

「あー。黒田先輩ね」

「背が高くて、カッコいいよね？」

祥子が美奈子に合わせてそう言ったが、ヒカルは顎を人差し指に当てて少し考えると、頭を横に振った。

「私はやっぱり、白沢先輩がいいなあ〜」

（だ、ダメだ、こりゃ…）

美奈子が小さく溜息を吐くと、それを見た祥子が苦笑した。二人で肩をすくめながら笑っていると予鈴が鳴り、3人は早足で教室へと戻った。

放課後になり、美奈子は体験入部をするために料理研究会のある調理室へと急いだ。

調理室は1階にあり、裏庭に面した広い部屋だ。扉には手書きの「料理研究会によっこそ！」の文字とケーキなどの絵が描かれた紙が貼ってある。その扉の向こうから少し漏れ聴こえる笑い声を聞きながら、美奈子は部屋の扉をノックした。

「はい。開いてるから、遠慮なく入って〜？」

中から柔らかな女生徒の声が聴こえ、美奈子は少し緊張気味に深呼吸を一つすると「失礼します」と言いながら扉を開いた。

「えっと、あの…。料理研究会に体験入部させていただきたいんですけど…」

遠慮がちにそう言う美奈子に、一人の女生徒が笑顔で近付いてきた。

「いらっしゃ〜い。どーぞ、どーぞ。そんな所に立ってないで、こっちに来て自己紹介してね？」

「あ、はい…」

他の数名の女生徒達の視線を浴びながら、美奈子は一団に近付いていった。

「えっと、あの…。1年A組の桜木美奈子です」

美奈子が自己紹介をしてお辞儀をすると、周りの女生徒たちが一斉にうーんと唸りながらブツブツと何やら呟き始めた。

「さくらぎ、みなこ…。さくら…。みな…」

「さみ…。さく…?」

「さ…。うーん…」

「え? えーっと、あの…?」

美奈子がうつたえながら周りを見渡すと、美奈子と同じ1年生の赤いリボンを付けた女生徒が2人、苦笑しながら肩をすくめた。

「いつそ『キミ』、とか?」

「それなら苗字と名前の真ん中から『キナ』はどう?」

「キナコ? アンと合うかも」

「じゃ、キナコでいいかしら?」

唐突に訊かれた台詞に、美奈子は「はい?」と言って首を傾げた。
「ああ、ごめんなさい、桜木さん。これ、うちの洗礼みたいなものだから」

眼鏡をかけた女性が、ウフフと笑いながらそう言った。胸のリボンは緑色だから、この人は3年生だ。

「えっと、その、『洗礼』って…?」

恐る恐る美奈子が尋ねると、その3年生がニッコリと微笑んだ。

「それは、自己紹介するとわかるわよ? じゃ、私から。私がこの料理研究会の部長の水木苑子^{そのこ}。3年生です。ここでは『ミソ』って呼ばれてます。ヨロシクね? じゃ、そっち側からそれぞれ自己紹介して?」

ミソ先輩に促され、右端にいた先輩から自己紹介が始まった。

「私は副部長の小林杏^{あん}。3年よ。『アン』って呼ばれてます。あ、

このアンはアンコのアンね」

「3年の花巻聡美^{はなまき さとみ}。『サト』です」

「私は2年の花巻詩織。『サト』の妹で、『シオ』って呼ばれてます。よろしく!」

「同じく2年の五味岡真紀^{ごみおか まき}。『ゴマ』です…」

（ミソ、アン、サト、シオ、ゴマ…。なるほど。それで私がキナコなのね?）

美奈子が頭の中で納得していると、ミソ先輩が美奈子の側にいる

1年生にも自己紹介をするようにと言った。

「1年の根岸由香里です。さつき付けられた名前が『ネギ』です。よろしく」

「私は栗田美幸です。私の名前は、まあ、ご想像通り、『クリ』なわけだけど。よろしくね、キナコちゃん」

「あ、うん。よろしくね？」

美奈子が他の1年生に挨拶を終えると、ミソ先輩が満足気に微笑んで皆の前に出た。

「さ、じゃあ、今日は体験入部ってことで、我が部恒例のお茶会にします。で、私達2年と3年が休み時間に仕込んでおいたクッキー生地を使って、これから皆でクッキーの型抜きとデコレーションをして焼きます。で、焼き上がったならそれを食べながらお茶会ってことで」

わあ、と喜ぶ1年生を見ながら、2年生と3年生が微笑んだ。

「じゃ、生地を取りに行くついでに、1年生に軽く調理室の中を案内するから、ついて来て？」

アン先輩の言葉と同時に、全員が動き始めた。

「準備室に具材を保管できる冷蔵庫や、秤とか色々置いてあるの。鍵はミソちゃんと私が持つてるから、必要な時は声を掛けてね？」

「はい」

アン先輩と1年生3人は調理準備室に入った。

「あと、この棚はうちの部の物が入ってて、ここの鍵も私とミソちゃんが持つてるの」

そう言いながら、アン先輩が準備室の壁に並んだ棚の一部を指差した。

「アン先輩。そこには何が入ってるんですか？」

ネギちゃんの問に、アン先輩がフフッと笑いながら鍵を開け、木製の扉を開いた。中には紅茶の缶、ティーセット、その他にクッキーなどの菓子類が入っていた。

「我が部秘蔵のお茶会備品です」

「わあ。このティーカップ、かわいい！」

クリちゃんが嬉しそうにはしゃぐ。

「先輩方から代々伝わるティーカップだからね。大事に使ってね？」

「はいっ！」

「じゃ、クッキー生地を持っていくか」

冷蔵庫の中には、ラップに包まれた巨大なクッキー生地の塊が数個入っていた。

「こ、これ全部…。先輩達が今日、仕込まれたんですか…？」

驚きながら尋ねる美奈子に、アン先輩は涼しげな顔で答えた。

「そうよ。気合で今日、全部焼くわよ！」

「全部っ？ あ、でも、スゴイ量なんじゃ…。食べ切れませんよ？」

両目を丸くしながら驚く美奈子の反応を見て、アン先輩はケラケラと笑った。

「あはは。大丈夫、大丈夫。食べきれない分は保管して、今後のお茶会用にしたり、あとはまあ、行き先がちゃんとあるから」

「は、はあ…」

（行き先…？）

美奈子は首を傾げながら、クッキー生地を抱えながらアン先輩の後に続いた。

4人がクッキー生地を調理室に運び入れると、そこには既にエプロン姿の上級生達が小麦粉やめん棒を出して待っていた。

「はい、じゃ、1年生はここに予備のエプロンがあるから、これつけて、手を洗ってね？」

サト先輩にエプロンを手渡され、美奈子たちはそれぞれエプロンをつけて手を洗う。そうこうしている間に上級生達は2つのグループに分かれて生地を伸している。

「さすが、先輩達、手際がいいね」

「うん」

1年生たちが小声で囁き合っていると、ミソ先輩から声が掛かった。

「じゃ、2つのグループに分かれたから、ネギちゃんとクリちゃんはそっち。それから、キナちゃんはこのちのグループに入ってるね？」

「はい」

美奈子は言われた通りにミソ先輩、アン先輩とゴマ先輩のいるグループに入った。ミソ先輩が手際よく伸した生地に、美奈子はアン先輩と二人で型抜きをどんどん押し進めていき、それをゴマ先輩が手早く鉄板の上に乗せていく。

一通りの生地を抜き終わったところで、今度は全員で好きなようにクッキーをデコレーションしていった。

「ゴマ。それ、チョコチップ乗せ過ぎじゃない？」

「これはチョコチップクッキーってことでいいんです。ふふふん」

「それじゃ、焼いてる間にチョコレートが溶けて、ただのチョコクッキーになっちゃうよ？」

「それでもいいです。チョコさえ入ってれば」

「なにそれ」

「あはは」

先輩達の遣り取りが、美奈子にはとても微笑ましかった。

「ところでさ、話は変わるけど」

不意にゴマ先輩が真面目な顔で美奈子を見ながら言った。

「キナちゃんって、白沢君とどういう関係？」

「は、はいっ？」

突然の話の変わりように、美奈子の頭はついていけなかった。

「か、か、関係って…？」

慌てる美奈子を怪しむように見つめるゴマ先輩の後ろで、ミソ先輩とアン先輩がニヤニヤしながら聞き耳を立てている。

「だって、昨日の朝といい、今日の昼といい…。二人が親密な様子

を目撃しちゃってるからさ。親戚か何か？」

「え、えっと、実は昨日が初対面なんですけど…」

「ええっ！ 親戚じゃないの？ ショック」

ゴマ先輩は何だか残念そうだ。

「何で先輩、そんなに残念そうなんです？」

「気になったので、美奈子は単刀直入に尋ねてみた。

「あら、だって。親戚だったら、余計な心配しなくてもいいじゃない？ それに、ここで作ったお菓子とか、白沢君に持って行ってもらえるかな」とか思ったの」

「ああ、なるほど…って、ええっ？」

（『余計な心配』って…？ それに、私を使いつ走りにするつもりだったってというのは、どうよ？）

美奈子が両目を見開きながら驚いていると、ミソ先輩とアン先輩が後ろでクスクスと笑う声が聴こえた。

「ゴマ。残念だったね。せつかくお近づきになるチャンスが出来たかと思ったのにね。心配事が増えたね」

「やっぱり、自分の力で近づくしかないんじゃないの？ 今年は同じクラスになったんでしょ？」

この状況から、考えられることは、一つ。

「ゴマ先輩。ひょっとして、白沢先輩のこと、す…」

「うひゃああああ！」

調理室にゴマ先輩の絶叫が鳴り響いた。

「ゴマ。うるさいよ？」

少し離れたテーブルから、サト先輩の呆れたような声が聴こえたが、美奈子はそれよりも自分の口に押し付けられたゴマ先輩の小麦粉だらけの手の方が気になった。

「ほ、ほませんふあい…」

「あ、ご、ごめん！」

真っ赤な顔をしたゴマ先輩の手が顔から離れたが、何やら口の周りが粉っぽい。

「ぶつ。あはははは！」

「ミソちゃん、ダメよ、笑っちゃあ〜」

「だって、だって、キナちゃん、キナコっばい…！ あはは、あはははは！」

「先輩。それは、私が粉つぽいってことでしょうか？」

「う、うん…！ あはははは！」

「ごめんね、キナちゃん！ 洗おう！」

お腹を抱えながら大笑いするミソ先輩を置いて、ゴマ先輩に腕を引かれながら美奈子は皆から少し離れた洗い場まで来た。

「本当、ごめんね？」

「いえ、大丈夫です。それに今晚お風呂に入ればきれいになるし」

「本当、ごめん。あれはアクシデントだから。だから、入部やめないでね？」

「は、はい…。でも、先輩、その、白沢先輩のこと…？」

「だって、さ。彼ってその…」

ゴマ先輩はもじもじと俯きながら、ボソッと小さな声で「カッコ、いいじゃん？」と呟いた。

真っ赤になって口を尖らせるゴマ先輩を見て、美奈子は「可愛いな」と思った。

カッコいい男の子を、ただそれだけで純粹に好きになれる。そんな時代が自分にもかつてあったなあ〜と思いながら、ふと、高校生だった自分がカッコいい先輩をそれだけの理由で好きになった時のことを思い出した。

（そう言えば、あの時、祥子は「よく見た目だけで好き好き言えるもんだね」って呆れてたんだっけ）

今なら何故祥子がそう言ったのか理解できるが、当時の美奈子はそう言った祥子に腹を立て、数日間口をきかなかった。それがまた仲良くなったのは、美奈子が好きだった先輩が、他の女生徒から貰った手紙を読まずに笑いながら捨てているのを目撃したからだ。

（そうそう。あの瞬間に全てが萎えたんだっけ。懐かしいなあ…）

それでも、その時に抱いた感情の純粹さは愛おしい。

（私も大人になったもんだわねえ……って、今は高校生だっけ、そう言えば）

「ほら、ゴマとキナちゃん。いつまでも二人でそこに突っ立ってないで、こっちでちよつと休憩しよう？」

ミソ先輩の声が聴こえた。

「はい」

美奈子は先輩達がいるテーブルに向かって歩いた。調理室には、少しずつつクッキーの焼ける甘さと香ばしさの混じった香りが漂い始めていた。

コンコンコン！

「今度は誰よ？」

シオ先輩がうんざりした様子で音のした窓の方を振り向くと、そこにはＴシャツ姿の男子生徒が多数、窓にへばりつくように中を覗いている。シオ先輩は溜息を吐きながら窓を開け、その前に仁王立ちになった。

「何か、御用？」

「詩織……。いい匂いじゃん。俺達の方、ある？」

「無い」

一刀両断でシオ先輩が窓を閉めようとすると、男子生徒が窓枠を抑えて閉められないようにした。

「そんな事言うなよ。俺とお前の仲じゃん？」

「ちよつ！ ど、どんな仲よ！ ほら、行った行った！」

「あ、桜木……！」

知っている声が美奈子を呼んで、美奈子は驚きながら窓を見た。そこには、シオ先輩と押し問答をしている２年生の後ろから飛び跳ねながら手を振る健太がいた。

「あれ？ 健太君！ ってことは、このグループって……」

「サッカー部です」

その場にいた男子生徒全員が口を揃えて答えた。

「そういうわけで、君から是非！ 詩織を説得して、我がサッカー部の腹を満たしてくれ！」

「は？」

「もう、大輔！ だいすけ いい加減にしなよ！」

シオ先輩が怒ったように窓枠を掴んだままの2年生を睨みつけた。大輔と呼ばれた2年生はクスツと笑うと、何やらシオ先輩に囁いた。美奈子には彼が何をシオ先輩に言ったのかは聴こえなかったが、見る見るうちにシオ先輩の顔が真っ赤に染まっていった。

「わ、わかったから！ ほら、早く他の子達を連れて行ってよ！」

「おう。後でな！」

去って行くサッカー部御一行様から、健太の明るい声が聴こえてきた。

「桜木。俺にもクツキー！」

「余ったらね」

「よっしゃー！」

フッフ、と美奈子が笑っていると、窓を閉めたシオ先輩が美奈子に尋ねた。

「今の子、彼氏？」

「え？ あ。ち、違いますよ。クラスメートです！ そう言うシオ先輩こそ、さっきの人…。彼氏、ですか？」

「えっと…」

今度はシオ先輩が口籠もった。

「うん…。一応、ね」

「おー。やっぱり付き合い始めたんだ。それはおめでとう！」
いつの間にか、二人の側にはサト先輩が立っていた。

「姉よりも先に彼氏作るなんて、あんたって本当、抜け目無いわ」

「ちよっ！ お姉ちゃん！」

「で、どっちが告白したの？」

「お姉ちゃん！」

「はい。じゃ、その辺は後ほど家で、じっくりと…」

「あうう…」

ガックリとうな垂れるシオ先輩をフンと鼻で笑いながら、サト先輩は他の部員達のいる方へと行ってしまった。

「今日、家に帰りたくないなあ…」

「あはは。でも、羨ましいですよ？」

「何が？」

「仲のいい、お姉さんがいて。私は一人っ子なんで、羨ましいです」
美奈子は現実世界でも一人っ子だった。

「うるさいだけだねー。でも、うん。そっか」

シオ先輩はニッコリと微笑むと「ほら、もうすぐクッキー焼きあがるから行こう？」と言いながらオープンの方へと歩き始めた。

その時―。

コンコンコン。

（今度は誰？）

美奈子が後ろを振り向くと、そこには先程のサッカー部とは違う面子の男子生徒のグループが窓の外に張り付いていた。

「あ！ 緑山君！」

美奈子はその中に自分のクラスメートを見つけた。剛はバツが悪そうに、少し苦笑いをしながら一団の後ろの方から美奈子に向かって小さく手を振った。

窓の前にいる男子生徒が、ジェスチャーで「窓を開けて」と言っている。その顔は、覚えがあつた。向こうもそう思ったらしく、二人は「あ」と言いながら、お互いの顔を見つめていた。

「なーに？ 今度はどの部？」

声がして、美奈子が後ろを振り向くと、いつの間にかアン先輩が側に来ていた。

「はあ。まーったく、次から次へと…。ま、今日は仕方が無いわねえ…」

そう言いながら、アン先輩が勢いよく窓を開けた。

「タケ君、またたかりに来たの？」

呆れ顔でアン先輩がそう言うと、窓の外の黒田武士がニヤリと笑った。

「こんないい匂いさせてる方が悪いんだよ。どうせ去年みたいに大量に焼いてんだろ？　ちょっと分けてくれよ、アン姉」

「やーだよっ！」

アン先輩も、先程のシオ先輩のように窓を強引に閉めようとする。これが料理研究会の作法なのだろうか。

「アン姉、いいじゃん。可愛い従弟の頼み、たまには聞いてくれよな」

黒田の言葉に、アン先輩は片眉を上げながら上から目線で答えた。

「たまに？　お菓子作りの時に必ずたかりに来るのに、『たまに』……？」

アン先輩の勢いに、他の男子生徒達は少し後ずさっているのだが、黒田は物ともせずにニヤリと笑った。

「全部食うと、太るぜ？　アン姉のダイエットに協力してやってんだろ？」

「余計なお世話よ」

二人の遣り取りに、美奈子はクスクスと笑い始めた。

「ほら。後輩も笑ってるぞ？」

「あんたのせいでしょ？　とっとと練習に戻りなさいよっ」

「わかったよ。ほら、お前ら。戻るぞ！」

「おーっす」

ゾロゾロと男子生徒たちが体育館の方へと歩いていく。剛がいたと言うことは、男子バレー部だろうか。

「今のって、男子バレー部ですか？」

美奈子の問に、アン先輩が頷いた。

「そうよ。よくわかったね」

「バレー部に入るって言ってたクラスメイトの子が、後ろの方に紛れてました」

「ああ、なるほど。あのうるさいの、私の従弟なの。2年なんだけどさ。何も高校まで同じ所に通わなくてもいいのにねえ。腐れ縁ってやつよ。本当、腐ってるわ、この縁…」

「黒田先輩とは、今日のお昼にカフェテリアでお会いしました。あの時はちよつとぶつきらぼうな感じで怖かったけど、意外とお茶目なんですね」

「ああ、アレはガタイがいい割には、変に人見知りするからね。お茶目っていうよりも、内弁慶っていうかさあ…」

「やれやれ、と言いながらアン先輩が窓を閉めた。」

「ああいうのが沢山来るからさ、お菓子作るときは人数分よりも多めに作んなきゃなんないわけ。特に、新入生のための体験入部の時は、毎年大量にクッキーを焼くの。本当、何でこの調理室は1階にあるんだか。2階だったら良かったのになあ…」

「でも、楽しいですよ？」

「ま、あいつらも多少は分をわきまえてるからね。うちのいいお客さんでもあるし」

「『いいお客さん』、ですか？」

「そう。あ、その話は今度するね？ さてと、そろそろお茶会始めよっか」

「はい！」

二人は窓から離れ、冷ましていたクッキーを入れ物に詰める作業に加わった。

「えーっと、保存分はこのくらい、かな…。後は今日の分がこれで、残りは各自、持って帰るなり、ハイエナ共を餌付けするなり、好きに使って？」

ミソ先輩の言葉に、1年生が全員驚きの声を上げた。

「ええっ。こんなに頂いていいんですか？」

「ラッキー！」

喜ぶ1年生の顔を見ながら、上級生達がフフッと笑顔で笑った。
「いいのよ。だ・か・ら」

「入部してね？」

満面の笑顔で合唱されては、断る気なんて到底起こらない。

結局、美奈子を含む１年生は全員、その日のうちに入部届けをミソ先輩に提出した。

体験入部も終わり、下校の時間になつて美奈子はヒカルと待ち合わせをしていた校門にやつて来た。そこには既にヒカルがいて、祥子や剛、健太と一緒に何やら楽しそうに話をしていた。

「ヒカルちゃん、ごめ〜ん。片付けに手間取っちゃって。お待たせ〜って、皆、勢揃いでどうしたの？」

美奈子に気付いたヒカルが両手を合わせ「ごめ〜ん」と言い、その横で祥子が苦笑いしている。

「？」

近づく美奈子に、健太が笑顔で両手を「ちょうだい」の形に差し出してきた。その姿はまるで御主人様にエサをねだる子犬のようだ。

「桜木、クッキー！」

「健太君。私、『余つたら』って言つたよね？」

「ええっ！ 余つてないのか？」

大げさに驚く健太を見て笑いながら、美奈子は手提げの中から紙ナプキンで作られた小さな包みを数個取り出した。

「なーんて。ちゃ〜んとありますよ〜。はい、これは健太君の分。それからこれが緑山君の分」

「お、悪いな」

「私のは〜？」

ヒカルがぶうと両頬を膨らませながら尋ねた。

「もちろんあるよ。これがヒカルちゃんので、こっちが桃川さんの包みを差し出された祥子が小さく驚いた。

「え？ 私の分もあるの？ ありがとう……」

遠慮がちに受け取る祥子を見ながら、美奈子はハタと昔、祥子が甘い物が苦手だったことを思い出した。

「あ、ごめん。甘いのが苦手だった？ もしいらなかったら家に持って帰って、弟さんにあげてね？」

「うっん、そうじゃなくて……。ありがとう！ いただきます」

「よかった」

美奈子のクッキーの包みが出てくる手提げの中をちらつと覗き込んだヒカルが言った。

「ねえ。クッキー、まだあるじゃん。これ、誰の？」

「ああ、小波先生におすそ分けしようと思って」

「小波先生？ 保健医の？」

ヒカルの「何で？」と書いてあるような顔を見ながら、美奈子は少し笑った。

（ヒカルちゃんって、本当に思ってることがそのまま顔に出るなあ……）

「実はね。小波先生って、部屋がお隣さんなの」

美奈子の答えに、ヒカルは「へえー」と言いながら「納得した」という顔をしたが、すぐに「？」という表情をして美奈子の手提げの中を遠慮無しに覗き込んだ。

「でもさ、まだあるよ？ クッキーの包み」

「残りは予備！」

「だ〜れ〜の〜？」

ヒカルの顔には「これは白沢先輩に渡すの？」と書いてある。それを少しでも考えなかったわけでもないのに、美奈子は余計にバツが悪そうに後ずさりした。

「ち、違うよ？」

「何が違うの〜？」

ヒカルが美奈子ににじり寄っていると、ちょうど美奈子の携帯が鳴った。美奈子は慌てて携帯をカバンから取り出すと、着信元を確認せずに耳に当てた。

「あ、ヒカルちゃん、ちょっとゴメンね？ はい、もしもし？」

『僕。白沢だけど』

「！ あ、せ…、じゃなくて、えーっと、こんにちは。あはははは」
美奈子を睨みつけているヒカルの目の前で、この電話はマズイ。
美奈子は一ツ深呼吸をすると、少し小さめの声で言った。

「あの、申し訳ないんですけど、折り返し掛け直しても宜しいでしょうか？」

『なーに？ もしかして、物凄くバッド・タイミング？』

受話器越しに、ちよつと不機嫌そうな白沢の声が聴こえた。

「すぐに折り返しますから！」

少しの沈黙の後、白沢の声が受話器から流れた。

『うーん。このまま話し続けて君を困らせるのも面白いけど、まあいいや。わかった。す・ぐ・に・折り返してよね』

そう言つて電話が切れ、美奈子はホツと安堵の息を漏らした。

「桜木さん、大丈夫？」

祥子が少し心配そうな顔をして美奈子の顔を覗き込んだ。

「あ、うん。大丈夫。あの、皆と先に帰つてて？」

「う、ん。いいけど。どうしたの？」

さらに心配そうな顔をする祥子に、美奈子は苦笑しながら小声で告げた。

「私、魔王様に折り返し電話する約束しちゃつて…」

「魔王…。ああ」

始めはキョトンとしていた祥子が、思い当たった様子で頷いた。

「わかったわ。じゃ、また明日ね？ 藤寺さん、皆。行こうか」

「あれ？ ミナちゃんは？」

「教室に忘れ物したんだつて」

「ふーん。じゃ、ミナちゃん、また明日」

先に帰ろうとした一団から、何故か剛が抜けて美奈子の元へやつて来た。

「桜木、本当に一人で大丈夫か？ 日も暮れてきたし、何なら俺、ここで待つてやるけど？」

「うん。大丈夫。でも、もしかしたら調理室かもしれないから」

「そつか。じゃ、気をつけて帰れよ？」

「うん、ありがとう」

美奈子が笑顔で頷くと、剛が少し目線を逸らしたまま「じゃ」と手を小さく振って向こうへと行こうとして、数歩先へ行ってから振り返った。

「桜木。クッキー、サンキュ」

「あ、うん。どういたしまして」

ちよつと照れながら去って行く剛の後姿を見てみると、後ろから不意に声が掛かった。

「青春ねえ……」

声の主は帰宅途中の小波だった。

「こ、小波先生……」

「いいわねえ、何かこう、乙女なシチュエーションってやつ？」

ちよつとドラマがかった物の言い方をする小波に、美奈子は苦笑した。

「そうですね。少女マンガっぽいですよ、今は」

「あら。意外と冷めてるのね、あなたって」

ガツカリしたような小波に、美奈子は肩をすくめてみせる。

「いやあ、今ので頼まれて目を潤ませたり出来たらよかったんですけど、中身はアラフォー女ですから、私……」

「あらやだ。ひょつとして、同世代!？」

「はい？」

思いがけない状況に、二人はお互いの顔を見つめあった。小波が美奈子を手招きし、美奈子が近付くと、耳元で誰にも聴こえないように囁いた。

「私、こつちでは今26だけど、本当だったら、もうすぐ40なの」

「ええっ？ 私は、本当は38です！ 同世代、ですね……」

「よね」

小波が嬉しそうに微笑んだ。

「きゃあ、うれしい」。ねえ、これから二人で飲みに行かない？」

「先生、私、ここでは16ですって…」

「あ、そつか。それは残念。じゃ、家で飲む？」

「それも同じですよ、もう…。あ、私、これからちよっと人に電話を…」

と言い掛けたところで、美奈子の携帯が鳴った。今度は着信元を見た。やっぱり、白沢からだ。

「ごめんなさい！　今、掛けるところだったんです！　これは本当！」

開口一番、とにかく受話器に向かって謝ると、受話器の向こうから溜息が漏れた。

『君、す・ぐ・に・掛け直すって、言っただよねえ？』

「だから、ごめんなさいってば！」

平謝りを続ける美奈子を見ながら、小波はわざと電話の向こうに聴こえるような声で言う。

「あら、お取り込み中？　じゃ、私、先に帰るわね。気が向いたらまた、うちに遊びに来て？」

「あ、小波先生、ちよっと待って！　これ！」

美奈子は慌てて手提げ袋の中からクッキーの包みを一つ取り出した。小波は笑顔でそれを受け取ると、包みに鼻を近付け、「あら、いい香りね」と言っただ嬉しそうに微笑んだ。

「ごちそうさま。じゃ、またね？」

「はい、ありがとうございます！」

会釈をした美奈子に向かつて、手をひらひらと振りながら去って行く小波の後姿を見送っていると、受話器の向こうから『ふうん』と言う声が聴こえた。

『何？　小波先生と君って、友達？』

「友達っていうか…。部屋が隣なんです」

『へえー。今度、遊びに行っちゃおう』

「だ、ダメですよ！」

『いいじゃん。ま、それより…。今は、話せる？』

「はい。大丈夫ですよ？」

『クッキー、余ってる？』

「な、何で知ってるんですか？」

受話器の向こうの白沢は美奈子の反応を楽しむように笑いながら答えた。

『だって、毎年恒例だよ？ 体験入部の時の料理研究会のクッキーって。どうせ沢山もらったんでしょ？ 残りをちようだい？』

（あ、そうなんだ…っていうか…）

「先輩、どうして私が料理研究会に行ったの、知ってるんですか？」

白沢は美奈子の間に、クスツと笑いながら答えた。

『だって、君がランチの時にそう言ってたの、聴いてたし』

（地獄耳っ？）

「先輩…。まるでストーカーみたいですよ？」

『聴こえちゃったもんは仕方ないよね？ で、余ってるんだったらさ、明日の朝、例の庭園に持ってきてよ』

（どうせ嫌って言ったたら、後で難癖付けて来るくせに…）

美奈子はとりあえず、白沢に逆らわないことに決めた。

「わかりました。この間と同じくらいの時間でよろしいでしょうか？」

美奈子がいっきりに事務的にそう言うと、白沢がクスツと笑いながら『よろしい』と偉そうに答え、その白沢の声に、「ガクー。そろそろ始めるぞー」と言う男性の声が被った。白沢はその声に『わかった。すぐに行く』と答えると、『僕、もう行くから、じゃ、明日の朝ね』と美奈子に言って電話が切れた。

（へえー。先輩、ガクって呼ばれてるんだ）

少し、不思議な感じがした。自分の知らない世界を少し垣間見たような、そんな不思議な感覚。

（まあ、愛称の一つや二つ、誰だって持ってるしね？）

美奈子は一人でそう納得すると、自宅への帰路に着いた。

4話 「ライブ」

最初の週の残りの日々は、最初の数日間の怒涛のような日々とは違ってかわって、割と平穏無事に過ぎていった。

部活はほぼ毎日あったが、実際に調理室を使って料理をするのは週に1 - 2度程度。その他の日は調理室でお茶会をしたり外に皆で食へに行ったりするだけで、あまり出欠にうるさくもないので、美奈子には気が楽だった。

正式に料理研究会に入部を決めた後、新入部員達に部長のミソ先輩が言っていた。

「食べ物もさ、皆好みがあるじゃない？ だから、その時の食べ物に苦手だったら、別に来なくてもいいわけ。こつちだって、強要したくないからね？ その代わり、部活に出られない時は必ず私かアンの連絡してね？」

なるほど、と美奈子は思った。

（確かに、キライな物を無理矢理食べたりしたら、部活が楽しくなくなっちゃうもんね）

部費は月々500円。残りは生徒会から支給される経費と、時折行なうベークセールなどで賄うんだそうだ。

「ベークセールって、何ですか？」

1年生のネギちゃんの間に、副部長のアン先輩が答えた。

「ベークセールって言うのは、うちの部で焼いたクッキーやスポンジケーキを、校内のどこかにテーブルを用意して、そこで売りさばくことを言います。6月の頭に一度、やるからね？ で、その売上で、夏休み中に合宿行くから」

「え？ 料理研究会なのに、合宿があるんですか？」

美奈子の間に、上級生が全員、当然という顔をして頷き、ミソ先輩が補足してくれた。

「行き先も、やることも、毎年違うの。我が部の伝統で、毎年春に

2年生がその年の合宿に良さそうなプランをいくつか立てるんだよね。で、ベーカセールの前にプランをいくつか絞って、ベーカセールの目標額を決める。場所によっては、沢山売らないと行けないからね」

「ちなみに、私達が1年の時は、皆で一流ホテルのデザートビュッフェに行ったの。去年は新しく出来たフレンチレストランでランチしたわよね？」

アン先輩の言葉に、サト先輩が苦笑しながら頷いた。

「そうそう。ベーカセールの売上が足りなくて、ディナーからランチに格下げになっちゃったんだよね。今年のプランは、大丈夫？」

サト先輩の間に、2年生がニヤリと笑いながら「まだヒミツです」と答えた。

「ま、合宿も参加は自由だからさ」

ミソ先輩の言葉に、1年のクリちゃんは「絶対に参加したいですよぉ」と本気で言っていた。

その後、歴代の料理研究会の合宿の記録が残っているということで見せてもらったが、パティシエ専門学校に一日体験入学とか、誰かの親戚が経営する軽井沢のペンションに2週間泊り込みでレストランの手伝いをしたり、中華街で飲茶豪遊とか、寿司食べ放題まであった。

「…すごいね、歴代の先輩方」

「うん、そうだね。来年は、私達が考えていいんだよね？」

「今から色々考えておいた方がいいかもね。それにしても、楽しみ！」

3人の1年生達は合宿記録を眺めつつ、様々な合宿妄想にふけった。

「へー。楽しそうな部活でよかったね、ミナちゃん」

入学から2週目。美奈子がヒカルと祥子と3人で学校のカフェテリアで昼食をとるのが定番になりつつあった。

「うん。先輩方も皆、楽しい人たちで、毎日楽しいよ？ テニス部とバスケ部はどんな感じ？」

美奈子の問に、ヒカルは「うん、まあ、こんなもんかなって感じ」と答え、祥子は「私も」と言いながらジュースを飲んだ。

「私も料理部みたいのに、外に食べに行く部活が良かったかも」

ヒカルがボヤきながらテーブルの上に突っ伏すと、美奈子が苦笑した。

「いやいや、ヒカルちゃん。別に毎日食べ歩いてるわけじゃないから、私達」

それでも、ヒカルの落ち込みは収まらない。理由は2つ。1つはバスケ部の練習が中等部のものよりも厳しいからで、もう1つは先週、美奈子が体験入部で作ったクッキーの残りを白沢にあげたことがバレたからだ。

美奈子が「困ったな」という顔で祥子を見ると、祥子は「ドンマイ」と言う感じで美奈子の肩をポンポンと叩いた。

「ヒカル、なぐに沈没してんだよ？」

明るい声が聴こえて振り向くと、そこにはクラスメートの赤井健太と緑山剛が立っていた。

「その声は、アホ健太…？ 乙女心のわかんないアンタに、何も言われたくないわ…」

突っ伏したまま答えたヒカルの言葉に、健太が眉間に皺を寄せながらアメリカ人のように両手を上に向けて肩をすくめている。

「はあ？」

困り顔の美奈子と祥子、そして突っ伏したままのヒカルを交互に見て、健太は「おまえら、ケンカでもしたのか？」と身振り手振りで言ってきたが、美奈子と祥子は同時に首を横に振った。

「ふーむ。謎だな」

「ああ。じゃ、健闘を祈る」

まるで、逃げた者勝ちとでも言うように、健太と剛がそそくさとカフェテリアを後にした。

「あれ？ 美奈子ちゃんのお友達、体調でも悪いの？」

もはや聴き慣れた声の持主は、誰あろう事の元凶の一人である白沢学だった。その隣には、白沢の友人の黒田武士もいる。

「あ、白沢先輩に黒田先輩。こんにちは」

美奈子が白沢の名前を出した途端、ヒカルがガバッと起き上がって髪の毛を直して白沢に向かって笑顔を向けた。

「し、白沢先輩、こんにちは！」

（黒田先輩は無視かい！）

美奈子はあまりにもハツキリした態度のヒカルに苦笑した。それは隣にいた祥子も同様らしい。

「うわ……。ビックリした。何だ、大丈夫そうだね」

白沢はそう言いながら美奈子を見て微笑むと、「じゃ、またね」と言っただけで黒田と共にカフェテリアを去って行った。

「あ、行っちゃった……」

ヒカルはあからさまにガッカリした様子で、またテーブルに突っ伏してしまった。

「せっかく、今度会ったら自己紹介しようと思ったのに……」

「それならそうと、先に言ってくればよかったのに……」

突っ伏したままのヒカルの背を軽く撫でながら、美奈子が言った。美奈子の言葉に、ヒカルはむっくりと身体を起こすと、膨れっ面で言った。

「中学で3年間言えなかったから、もう慣れたよ」

「じゃ、高校では言えるようにしようね？」

祥子が励ますのに合わせて美奈子も頷くと、ヒカルは気持ちを少し浮上させて小さく微笑んだ。

「うん。次は頑張る」

白沢の姿が見えなくなっても、ずっとカフェテリアの出口の方を見つめるヒカルを見て、美奈子はちよつと複雑な心境だった。

先週、体験入部で焼いたクッキーの残りを持って白沢に会った時

に、美奈子は白沢にあまり自分に校内で話しかけないでもらえないかと頼んだ。理由は簡単だ。これ以上、白沢効果で校内で目立ちたくなかった。

美奈子の提案を聞いた後、少し黙ったまま何かを考えていた白沢が、美奈子を実つ直ぐに見つめて言った。

「なら、電話とメールはOK？」

「え？ あ、はい」

「じゃあ、しばらくの間はそれで行くか。別に急ぐ必要も無いし」
屈託の無い笑顔で笑う白沢に、美奈子は尋ねた。

「せ、先輩は…」

「うん？」

「先輩は、どうして私に、その、何て言うか…」

（やだ。私、何を聞こうとしているのかしら。この子はきっと、私をからかって遊んでるだけなのに）

美奈子は首を横に振ると、「やっぱり、何でもないです。じゃ、私、教室に行きますね？」と言ってその場を去ろうとした。

「美奈子ちゃん」

「はい？」

呼びかけられて立ち止まって振り返ると、クッキーの入った缶を片手に持った白沢がすぐ近くに追いついていた。

「ライブは、来るよね？」

「もちろんです。楽しみにしていますよ？」

美奈子の答えを聞いた白沢は、安心したように微笑んだ。

「なら、いいや」

「？」

美奈子が首を傾げると、白沢が笑いながら美奈子の頭を子犬をあやすように撫でた。

「よしよし」

「ちよつ。止めてくださいよ、先輩。犬ですか、私は…」

白沢は「ああ」と言いながら手を止めた。

「そうか。ペット…。うん。なるほど」

「ペ、ペットおお？」

驚きながら髪を直している美奈子を見てクスッと笑いながら、白沢は「じゃあね」と手を振りながら去って行った。

「な、何なのよ、ペットって…。失礼しちゃう。ペットはクッキー焼かないわよっ」

口調は怒っていても、美奈子は何故か笑っていた。
と、その時。

「みいゝなあゝちゃああゝん？」

（ぎよ）

美奈子が恐る恐る後ろを振り向くと、そこには凄まじい形相をしたヒカルが立ち、その後ろには全身で「ごめゝん」と言っている祥子が立っていた。

「あ、えーつと、お、おはよう！ ヒカルちゃん！」

「見いゝたあゝわあゝよおおゝ？」

「な、何を？」

「白沢先輩がミナちゃんの頭をこっ、くしゃって…。青春してるじゃないのよ。ず・る・い！ 私も先輩にくしゃってしてもらいたい！」

ぶうーと膨れっ面をしているヒカルに、美奈子は違う違うと手をひらひらと振った。

「余ったクッキーを全部持って来いって言われたから、渡しただけ。そうでもないよ、後が怖いよ、あの暴君は」

「ぼっ、くん…？」

首を傾げるヒカルに、後ろから苦笑しながら祥子が言った。

「怖い人ってことよ」

「へ？ 怖いのか？ 白沢先輩が？」

驚き顔のヒカルに向かって、美奈子は力強く頷いた。

「だって、超ワガママなんだもん。あの人」

これで納得かと思いきや、ヒカルは違った。

「ワガママ、言われたの？ いいなあ」

「え！ そこっ？」

「私も先輩にワガママ言われてみたあゝい」

美奈子と祥子はお互いの顔を見合わせて苦笑した。お互いの顔が「だめだこりゃ」と言っていた。

それ以来、白沢は美奈子との約束を守って、学校内ではあまり話し掛けては来なくなった。その代わり、毎晩メールと電話は掛かってくるけれども。

「はい、じゃ、お休みなさい」

ほぼ日課と化してしまった白沢との電話を切りながら、美奈子はリビングからベランダに出た。昼は暖かくなってきたとは言え、夜の空気はまだ肌に少しひんやりと冷たい。

毎日が、慌しく過ぎていく。

自分が高校生の時も、こんな風に一日が短く感じられたのだろうか…？

夢かと思っていたこの世界も、さすがに暮らし始めてから1週間が過ぎた辺りで考えを変えた。夢ならば、こんなに長く続くはずが無い。やっぱりこは、「ドキめも」の世界なのだ。

それでも、美奈子には自分の役割がよくわからなかった。

（そもそも、私に役割なんてものがあるのかしら…？ 私はヒロインじゃないって、小波先生はそう言ってた。でも、私の周りには「ドキめも」の攻略対象になっている男の子達が沢山いる。なら、私は…？）

ふと、そんなことを疑問に思うこともあるが、主婦生活と違って高校生活はかなり慌しく時間が過ぎてく。そんな時間を楽しいと感じ始めてから、美奈子の中から、この世界に対する疑問が徐々に失われ始めていた。

「なーんか、馴染んじゃってるわねえ…」

ある日の夕方、おしゃべりを楽しみながら廊下を歩く美奈子達の後姿を見ながら、小波が言った。

「ああ。全くだ。誰が最初からこの世界にいたのか、あれでは全くわからないな。」

小波の側にいた男が呆れ半分にそう言った。

「ま、誰と誰がくつつこうが、私には関係ないんだけど」

小波がそう言いながら保健室へ戻ろうとした時、男が小波の腕を掴んだ。

「おいおい。随分と放任主義だな。ルートの確保もお前の仕事だろう？」

「放してよ」

小波が腕を振って男の手から逃れると、男は「全く……」と溜息混じりに呟きながら前髪をかき上げた。

「勘弁してくれよ。攻略対象がヒロイン以外の女に強い興味を示し始めてる。普通、この状態はまずいだろ？」

男の言葉に、小波は眉間に皺を寄せながら男を上目遣いに睨み付けた。

「なら、ヒロインのパラメーターに色でも付けたらどうです？ 攻略対象男子だって、ここではただの男の子なんです。ヒロインよりも魅力的な女の子が現れたら、そっちに興味を持って当然のことでしょう？」

「走り出した後のパラメーターの変更は不可能だ。お前だって、それはわかってるだろう？」

当然だとも言うような男の口調に眉をしかめながら、小波は上目遣いに男を睨み付けた。

「なら、妨害でもするのね。でも、気をつけたほうが良いわ。若い子って、障害がある方が燃えちゃったりするから。ロミオとジュリエットの気分になっちゃったりしたら、厄介よ？」

男は小波の台詞を聞きながら、頭を抱えた。

「全く。今年は、全てが想定外だ」

小波はそれを聴いて、クスツと笑った。

「想定外、ね。想定外なのは、攻略対象の行動？ 急に生き生きとし始めちゃった美奈子ちゃん？ それとも、そんな彼女の『本来の姿』をすっかり忘れていた貴方？ どうなのかしらね？ 金平先生」
金平恭平は少し怒ったような顔をしながら、小波の側から足早に去って行った。

あつと言つ間に角を曲がつて見えなくなった金平を見送りながら、小波は軽い溜息を1つ吐いた。

「まーったく、素直じゃないんだから。あれじゃ、美奈子ちゃんを他の男の子に取られちゃうわよ」

ふと、その状況を頭の中で妄想して、小波はニヤリと微笑んだ。
「あら。それも面白いわね。生徒同士の恋愛に嫉妬する教師って、アリかも……。ふふふっ」

小波は足取りも軽く、保健室へと戻っていった。

白沢のバンドのライブの日がやってきた。

今は金曜日の夕方。美奈子は自宅のリビングを慌てて歩き回りながら、バックの中身を確認していた。

「財布、よし。あ、財布の中身！ えーっと、現金はこれくらいあれば足りるかしら？ チケット、よし！ えーっと、それから……」

あ！ 携帯！

リビングの隅でチャージャーに繋がれていた携帯を引っこ抜く。

「携帯、よし！ 身だしなみ……。多分、これで大丈夫、よね？」

玄関口の姿見の前に立ち、最後の確認。

（ライブなんて、何年ぶりかしら……。最後に行ったのって、えーっと、短大の時？ うわあ……。10年以上前じゃない！）

昨夜、電話で白沢と話した時にどんな服で来るのかと訊かれ「普通にTシャツとジーパンで」と答えたら、見事に却下された。

『あのさあ。もうちょっと、僕らがステージから見てこう、頑張っちゃおうかなって気持ちになるような服とか、着れないわけ？』

「え？ 例えば？」

『可愛いキャミソールトップにミニスカートとか』

「…どうしてキャミソールトップなのかは理解できますけど、ステイジの上からじゃ、ミニスカートまでは見えないんじゃないやありませんか？ 先輩」

冷やかな美奈子の返答に、白沢が一瞬言葉を詰まらせた。

『あー。えっと…。うん。見える！ 見えるから大丈夫。着て来い。これは命令だ』

「命令って…。何で私の着る服まで、先輩に命令されなくちゃいけないんですか…」

『そんなの、僕の癒しのために決まってるだろ？ そういうことでじゃあね。オヤスミ』

「はあ。おやすみなさい…」

美奈子は電話を切ると、自分の部屋のクローゼットを開けた。キャミソールトップはあったような気がしたが、ミニスカートはなかったかも知れない。

「うーん。明日、放課後に買いに行こうかな…。時間とお金、あったかな…」

そう思っていた時に、美奈子の携帯が再び鳴った。白沢からだ。

「はい、桜木です」

『美奈子ちゃん？ ごめん。さっきの話だけど、やっぱり、ミニスカートは却下』

「あ、よかった。私、ミニスカートって持って無くって、買いに行かないといけないのになって思ってたんですよ。でも、本当にいいんですか？」

『うん。ミニスカートは、僕と二人だけの時にして。ライブだと、他のお客さんたちと密着することになるからさ。僕らのライブは女の子のお客さんが多いけど、万が一ってこともあるから』

「万が一…？」

『フフ。こっちの話。じゃあね。今度こそ本当にオヤスミ。あ、ラ

イブの後、勝手に帰っちゃダメだよ？　じゃ」

「はあ……」

電話が切れた。

（ま、ジーンズでいいなら、買い物に行かなくてもいいわ。その分、明日の夜は祥子と何か美味しい物でも食べちゃおっと）

そんな訳で、美奈子は今、祥子と待ち合わせた駅前に移動中だ。会場のライブハウスはこれから電車で3駅。二人は駅前に6時に集合して、軽く何かを食べてから行くことにした。

美奈子が駅前に到着するよりも早く、祥子は駅前に到着していた。待ち合わせ時間より、5分早い。

「桃川さん、早いね」

「あ、桜木さん。私、何か緊張しちゃって、気が付いたらすごく早く到着しちゃって……」

そう言う祥子は、シンプルなTシャツにジーンズと言った格好に、薄手のジャケットを羽織っていた。

「前から思ってたけど、桃川さんって、私服の時、イメージが結構違うよね」

「そう？」

「うん。制服の時は女の子っぽいけど、私服だと、何だかカッコいい」

美奈子の言葉に、祥子が照れくさそうに俯いた。

「ありがとう。本当はスカートよりジーンズの方が好きなの」

「そうなんだ」

「そう言う桜木さんも、ジーンズ似合ってるよ？」

「あはは。ありがとう。これは先輩命令でね。ジーンズ履いて来いって」

美奈子の言葉に、祥子がキョトンとしながら首を傾げた。

「何で？」

「さあ？」

二人はお互いに首を傾げながら見つめ合い、笑い始めた。

「じゃ、行こうか」

「うん！」

電車に乗るのは初めてじゃないのに、何だか冒険に出掛ける様な気分がした。

二人は目的地の駅前で軽く食事を済ませると、ライブハウスへと向かった。開場1時間前だと言うのに、ライブハウスの前には既に列が出来始めていた。

「うわあ。もう人がいる！」

「本当。すごいね」

「とにかく、並ぼう！」

「うん」

2人は列の最後尾を見つけ、そこに並んだ。並んでいるのは、圧倒的に女の子が多い。

「私、バンドのライブって、もっと男の子が多いのかと思ってた。それに、みんな、すごく派手な格好してるのね」

近くのコンビニから飲み物を買って帰って来た祥子が列を見ながらヒソヒソとそう言うと、美奈子が頷いた。

「服とかお化粧とか、すごいよね」

「ひょっとして、私達の方が、ここでは浮いてたりとか……？」

祥子と美奈子は、二人で顔を見合わせながら笑った。

やがて列が動き始めた。入口近くの看板には今日の出演バンドのリストがあつて、白沢のいる「アーク」は3番目にリストアップされていた。

（うわあ、何か、懐かしいな、この雰囲気）

中は、広いはずなのに照明や機材のせいで狭く感じる薄暗いスペースや、どこからともなく漂うタバコやアルコールの匂いがした。

「もうちょっと、前の方に行こうよ！」

美奈子が祥子に声を掛けると、少し雰囲気に圧倒されていた祥子が慌てて頷いた。

「う、うん…」

まだ一組目のバンドが始まる前で、スタンディングのエリアの人はまばらだ。

「この辺でいいかな？ トイレとか、今のうちに行っておいた方がいいかな？ それと、はぐれたら、えーっと、あの、非常口のサインの下で待ち合わせればいいかな？ ーって、桃川さん、聞いてる？」

美奈子が祥子にそう言うと、少し周りをキョロキョロと見渡していた祥子がハツとしながら美奈子を見た。

「あ、ごめん。何？」

「えーっと、今のうちにトイレ済ませた方がいいかなってことと、万が一はぐれたら、あの非常口のサインの下で待つこと」

「あ、うん」

「…大丈夫？」

「うん…。何か、未だかつて経験したことのない雰囲気だから…」

桜木さんは、こういうところに来たことがあるの？」

「私は…」

学生時代に何度か、と言おうとして、美奈子は慌てて言葉を飲み込んだ。今の美奈子にとって、「学生時代」は「未来」に起こることだ。

「に、2回、くらい…？」

ドギマギと誤魔化してはみたが、祥子はあまり気にしていないようだった。

「へー。そうなんだ。前にいた街で？」

「う、うん」

「すごいね。私は今日、初めて」

キラキラした瞳で興味深く機材や照明を見ている祥子は、雰囲気に対し馴染んだのか、何だか楽しそうだ。

やがて、一組目のバンドがステージに現れた。ギターや音響の調整が終わると、1曲目の演奏が始まった。お世辞にも上手とは言え

ない演奏に、美奈子と祥子は苦笑した。

一組目が終わり、二組目のバンドがセッティングを始めると、美奈子と祥子の周りに、人が少し増えた。

「こっちのバンドの方が、上手だね」

美奈子の耳元で、祥子が囁いた。

「そうだね。歌もこっちの方が好きかも」

「うん。そうだね」

二組目が終わる頃には、ライブハウスのスタンディング・エリアには人がいっぱいになった。

「うわ。混んできたね」

「しかも、押されてるう〜？」

「きゃあ！」

これが本当の「人波」だとか考えつつ、美奈子と祥子はお互いの身体にしがみつきながら、何とか場所をキープした。

「次、先輩達のバンドでしょ？ 人気あるんだね」

「みたいね」

やがて照明が落ちて、3組目のバンド「アーク」のメンバーがステージに入ってきた。と、同時に女の子達の歓声が耳を裂いた。

「キヤーーーーー！！」

「ガク~~~~！」

「ハルー！」

全身黒で固めた衣装でステージに上がった白沢の姿が見えた。白沢がニコヤカに客席に向かって手を振ると、歓声が一際強く響き渡った。

「あれ？ あれって…」

白沢とステージの反対側にいる、これまた全身黒尽くめのギターストを見て、美奈子は目を丸くした。

「ねえ、桃川さん…」

「桜木さん、あの人…」

美奈子と祥子はほぼ同時に顔を見合わせた。

「青木君、だよね？」

同時に口から出た言葉に、二人は一瞬唖然としながら、笑い始めた。

「あはは。同時だったね」

「うん。でも、あの人…」

「私も、青木君だと思う」

「だよね？」

前髪を少し変えているから、顔の印象が違うけれど、ギタリストはどう見ても二人のクラスメートの青木遥だ。

（青木君もいるなら、そう言ってくればいいのに）

美奈子がそう思いながら白沢の方を見ると、ちょうどベースのセッティングを終えて客席に向き直った白沢と偶然に目が合った。白沢が、いつものような不敵な笑みをしてみせたので、美奈子は顔の横で小さく手を振った。

「アーク」の演奏は、彼らの前に演奏した2バンドとは比べ物にならないくらい完成されていた。少し攻撃的な音楽だったけれど、それがハスキーなボーカルの声によく合っていたし、どのパートも上手いだけじゃなく、人を惹きつける魅力がある。

特に、ギターの青木は学校ではまるで空気のような不思議ちゃんだけれど、ステージの上では全身で自分の存在をアピールしていた。（すごい…）

美奈子が昔見たバンドでも、これほど興奮する演奏をしたバンドはいなかったと思う。美奈子は、いつのまにか両手を上げながら彼らに声援を送っていた。それは、美奈子の隣にいた祥子も同じだった。

あつと言う間にアークの演奏が終わり、最後のバンドの演奏が始まった。最後のバンドはトリらしく、素晴らしい演奏ではあつたけれど、美奈子はアークの時ほどはその演奏に興奮することは無かった。美奈子と祥子は最後のバンドの演奏の途中で、スタンディング・エリアから脱出した。

「ふう。なんか、汗掻いちゃった」

「私も。ちよつと、水貰ってくるね?」

「うん。ありがとう」

祥子がバーのセクションに水を取りに行っている間、美奈子は自分の携帯の受信ランプが光っているのに気付いた。

（あれ?）

白沢から、メールが入っていた。

『俺達、そろそろここから脱出するから。そのライブハウス出たら、電話して? 学』

時間は数分前。

美奈子は慌てて戻ってきた祥子を捕まえて水を一気飲みすると、ライブハウスの外へ出て電話を掛けた。

「もしもし!」

『あれ? 最後まで聴かなかつたんだ? さすがだね』

「どういう意味ですか?」

『後で教えるよ。それより、僕らは今、打ち上げに向かっているから、君もお友達連れておいで? えーっと、場所は…。場所、どこだっけ、ユウ?』

遠くで『うち』と言う声が聴こえた。

『OK。んじゃ、美奈子ちゃん。そのライブハウスの前の道を、西に向かってちよつと行くと、コンビニあるからさ。その角を左に曲がってしばらく真っ直ぐ歩くと、右側に半地下になってる店があるから。そこ。名前は炙本舗^{あぶり}』

「了解しました。すぐに行きます!」

『うん。じゃ、あとでね』

美奈子は携帯を切ると祥子に行き先を告げ、二人で歩き始めた。

「らっしやい!」

（やっぱり、飲み屋じゃないの? ここ…）

名前から察しても、「炙本舗」は立派な焼き鳥屋さんだった。

「お二人様ですか？」

若い女の店員さんに尋ねられて、美奈子はドギマギと答えた。

「えっと、あの、先輩に呼ばれまして…。バンドの、アークっていう…」

何と説明したらいいのかよくわからずに慌てていると、店員さんの後ろから聴きなれた声がした。

「あ、早かったね」

厨房口のようなところに、白沢が立っていた。

「今、迎えに行こうと思ってたところ。ナイスタイミングだね。こっちだよ」

「はあ…」

美奈子と祥子は応対をしてくれていた店員さんに軽く会釈をする
と、白沢の後を付いて行った。

白沢は慣れた足取りで、厨房にズンズン入って行く。

「つて、先輩。ここ、厨房…」

週末の忙しい時間と見えて、厨房の中では5、6人の人達が忙しく動き回っている。

「うん。そうだよ。でも、この先に楽園があるんだな、これが」

「は？ 楽園？」

3人は厨房を横切ると、裏庭のようなスペースに出た。そこには、アークの他のメンバーがピクニックシートの上に座っていた。

「あ、いらつしゃーい」

短い金髪をハリネズミのようにツンツンさせている人が、笑顔でこちらに手を振った。あの人は確か、ドラムの人だったと思う。

「お、お邪魔します」

「遠慮なくどうぞ。ここ、俺のうちだから」

「え？ あ、そうなんですか？」

「うん。ここの上に家族と住んでるんだ。でも、今日は結構暖かいし、ここだとちょっとくらい騒いでも怒られねーし」

「そんなわけで、えーっと、この子が美奈子ちゃん。で、この子が

…。ごめん。君、何ちゃんだっけ？」

困ったような顔をした白沢の問を受けて、祥子がずっと少し前に出て全員に挨拶をした。

「桃川祥子です。初めまして」

「美奈子ちゃんに祥子ちゃんね。よろしく。俺はユウ。アークのドラムね。他のメンバーは知ってるの？」

「俺は初めましてだよね？」

少し長めの茶髪をチョンマゲのようなポニーテールにしているボーカーが手を挙げた。

「俺、ヒロキ。よろしく。で、美奈子ちゃんがガクの彼女だろ？」

「あ、そうなんだ？」

端っこの方で一人でウーロン茶を飲んでいた青木が顔を上げた。

「え？ いえ、違いますよ。ね、先輩？」

美奈子が白沢に同意を求めると、白沢がニヤッと笑った。

「まだ、ね」

意味ありげにニヤリと笑う白沢を見て、青木以外のメンバーが「了解」と言うような顔をして頷いた。

「先輩！ 変なこと、言わないでくださいよ」

「だって、本当のことじゃない。今はまだ、恋人同士じゃないからね」

「だから」

美奈子が言いかけると、ユウがパン、と手を打って注目を促した。「はいはい、それはどっちでもいいから、皆その辺に適当に座つてよ。親父がうるさいからアルコールは出ないけど、とりあえず、全員ウーロン茶でいいか？」

はい、と返事をする美奈子達の傍らで、ヒロキが不満気に言った。「なあー。泡の出る麦茶はねーのかよ、ユウ」

「だーかーらー、親父が従業員全員にキツク言い渡してるからな。アルコールの入った飲み物は、例えば麦茶でも出ねーよっ」

「んだよー。こっちはライブでいい仕事した後なのになー」

「あと2年の辛抱だ、ヒロキ」

「2年っていうと、ヒロキさんは18歳なんですか？」

祥子がヒロキに尋ねると、ヒロキは手渡されたウーロン茶を飲みながら言った。

「ああ。俺とユウは、瑛星出たばっかなんだ」

「ってことは、OBなんですか？」

「ってことは、君たちも瑛星？」

「はい。私たち、青木君と同じクラスなんです」

祥子の言葉に、ユウとヒロキが少し離れた所ではーっと空を見上げている青木を見た。今の青木からは、先ほどのステージの上での姿が全く想像できない。

「ねえねえ」

ユウとヒロキが祥子と美奈子を手招きした。二人が近付くと、ユウが小声で囁いた。

「あのさ。ハルって、学校でもあんな感じ？」

「ハル…？」

美奈子が首を傾げると、ヒロキが笑った。

「『青木君』のこと。あいつ、名前が遥はるかだから、バンドじゃ『ハル』で通ってるの」

「あ、ちなみに僕は学問の学と書いて『まなぶ』だけど、バンドじゃ『ガク』で通してるから」

白沢が4人の間にシレっと割り込んできた。

「で、4人で固まって、何の話？ 僕に断りも無く、美奈子ちゃんの至近距離に近付いたらダメって言うておいたでしょう？」

フツと穏やかに微笑みながらそう言う白沢の瞳が微笑んでいないのに、美奈子は気付いた。

（先輩、相変わらず黒いです…！）

だが、ヒロキとユウはそれに慣れているのか、特に気にも留めずに言った。

「ああ。ハルは学校でもああしてポヤッとしてんのかなって訊い

てたとこ」

「そうそう。あいつ、ギター持っていない時は、電池切れてつからな」
5人は揃って青木を見た。疲れているのか、青木は上を向いたまま、顔が虚ろだ。

「今日は抜け殻になるの、早えーな」

「2曲目のソロでかーなーり、ぶっ飛ばしてたからな」

「そうだねえー」

5人がヒソヒソ話をしていると、厨房から裏庭に続く扉が開いて、中から白い割烹着を着た小柄なおばさんが料理の乗った大皿を抱えて出てきた。

「なあーに、頭くつつけて話してんの、あんた達？ 悪巧みなら他所でやってちょうだいねー。ほら、沢山食べなさい」

「おお、サンキュー、母さん」

「いいって。あら、可愛いお嬢さんたち。こんばんは」

ユウの母はそう言って美奈子と祥子に軽く会釈をした。

「あ、お邪魔してます。桜木美奈子です。よろしくお願いします」

「私は桃川祥子です。初めまして。お邪魔しています」

「ハイハイ。ゆっくりしていつてね？ それにしても、女の子が来るなんて珍しいわねえ。どちらが裕次郎ゆうじろうの彼女さん？」

ユウのお母さんの台詞に、ユウが顔を真っ赤にしながら立ち上がった。

「悪かったな！ どっちでもねーよ！ ほら、さっさと仕事に戻れ！」

「あああ、残念。お母さん、この子達みたいな可愛いお嫁さんだったら大歓迎よ、裕次郎？」

「いーいから、もー。ほら、行けよ！」

「あらあ。冷たいわねえ」

ユウのお母さんは「じゃ、ごゆっくり」と言って軽く会釈をすると、厨房へと戻っていった。

「ごめんね、裕次郎さん。二人とも僕が連れてきたゲストで」

クスツと笑いながらそう言う白沢に「うつせ！ 『裕次郎』 言うな！」と言いながら、ユウが座り直した。

「ユウさん、御自分の名前が嫌いなんですか？」

祥子が尋ねると、ユウが少しふて腐れながら言った。

「嫌いつて言うか…、何と言うか…。何か、俺に合わねーっていうか…」

「カツコいいじゃないですか、裕次郎って」

「でもよー」

ユウは少し下を向きながら頭を掻き、ポツリと呟くように言った。

「この名前、親父が石原裕次郎のファンだからって付いた名前なんだよなあ」

「石原…」

「裕次郎…」

美奈子の脳裏に、昔テレビで放送された古い石原裕次郎の映画が甦った。トレンチコートを着た男と女。波止場と海。その白黒のイメージと、今、美奈子の目の前にいる金髪に耳と鼻にピアスを付け、腕にタトゥーの入った少しマッチョな男性は、とてもじゃないけれど結びつかない。

「か、固まんなよ、二人とも！」

「そーだよ、二人とも。裕次郎さんに悪いよ？」

ちよつと真面目な口調でそう言う白沢に、ヒロキが笑いながら尋ねる。

「どつちの裕次郎に悪いんだよ、ガク」

「そりゃあもちろん、石原さんの方？」

「っだあー！ お前らー！」

「あはははは」

きつと、こんな遣り取りがいつも交わされるような仲間なのかな、と、彼らの姿を見ながら美奈子は思った。

「いいね」

ふと、祥子が美奈子の隣でそう呟いた。祥子も同じことを考えて

いたのかなと思うと、少し嬉しい。

「うん。そうだね」

学校とはまた違った、別のエネルギーを感じるの楽しい。

「おーっし、乾杯だー！」

ユウがそう言いながら、ウーロン茶の入ったグラスを片手に立ち上がった。

「えっ？ 今さら？」

青木の言葉に、ユウが胸を張りながら答える。

「うるせー。忘れてたんだよ！」

「仕方ねーなあ、うちのリーダーは。ハル！ こっちに来い！」

面倒臭そうに立ち上がるヒロキに声を掛けられ、それまで空気のように隅っこに佇んでいた青木が反応した。

「あ、うん……」

「えー、ではあゝ。本日のライブの成功を祝して。乾杯！」

「乾杯！」

少しぬるくなったウーロン茶を飲み干すと、全員座り直して食事を再開した。厨房で空のウーロン茶のボトルを新しいものに取り替えてもらい、裏庭に戻ってくると、白沢が美奈子を待ち構えていた。「御苦勞様。で、どうだった？ 俺達の演奏」

「良かったですよ？」

短い感想を言っただけで席に戻ろうとする美奈子を、白沢が引き止めた。「……それだけ？」

「えーっと、格好、良かったです」

「誰が？」

「全員……？」

「何でそこ、疑問系？」

「あはは……」

少し後ずさった美奈子の背中に、壁が当たった。

（あ、あら？）

白沢の顔が近付いてくる。

（ちょ、ちよつと…！）

「先輩…！」

「『ガク』って呼んで？ ほら…」

「先輩、あの、か、顔、近…！」

「『ガク』って呼んでくれないと、このまま近付く一方だよ？」

白沢の息が額に掛かる。

（え、え、え、ええええ…？ こ、このシチュエーションは、まさかっ？）

「が、が、が、ガク先輩！」

「ざーんねん。ここでは『先輩』は余計かな」

ふわっと白沢の右手が美奈子の左頬を包み込んだ。

「で、でもっ」

慌てる美奈子を少し斜め上から覗き込むように見詰めながら、白沢はクスッと笑いながら囁いた。

「はい、やり直し」

（落ち着け、私！ ガンバレ、私…！）

美奈子は小さく深呼吸をすると、白沢の底光りしているような瞳を上目遣いで見詰めながら言った。

「が、ガク…？」

「ん？」

少し満足気に微笑んでいる白沢は、一向に身体を離す気が無いみたいだ。

「ん？じゃなくて、あの、顔、近いです」

「当然でしょ？」

（何が当然？）

狭い空間の中であたふたしていると、急に耳元で別の声がした。

「…ウーロン茶、まだ…？」

「ひっ…！」

「うわっ…！」

白沢と美奈子が慌てて飛びのくと、そこには青木が立っていた。

「さつきから待ってるのに、君が抱えてるせいで飲めないんだよね……」

それ、と言いながら青木は美奈子がギュッと胸元で抱えているウーロン茶のボトルを指差した。

「あ……。ごめんね？ はい、これ」

美奈子がボトルを差し出すと、青木はそれを受け取って、すーっと自分の座っていた場所に帰っていった。

「あー、ビックリした。でも、助かった」

ほっと胸を撫で下ろす美奈子の手首が、白沢の手に強く掴まれた。
「ほお。『助かった』……？」

（うわ、まずい……！）

「さっきの続きと行きますか……？」

白沢は不敵な笑みを浮かべながら美奈子を壁の方へと再び押しやるうとしていく。

（うわーん。細い割に、力強いわ、この人……！）

「ほら。何が助かったって……？ ん……？」

（ドS……！）

「え、えーっと、あ、そうだ！ ウーロン茶を持って行ってもらって、助かったなって……」

美奈子が上手いぞ私！と心の中で自画自賛していると、クスクスと白沢が笑い始めた。

「な、何かおかしい事、言いました……？」

困惑しながら美奈子がそう言っていると、白沢は「いや」と言いながら首を横に振った。

「あはは。ごめん、ごめん。美奈子ちゃんのドヤ顔が、あんまり可愛かったものだから、つい……」

白沢はそう言っていると、美奈子の手を取って歩き始めた。

「戻ろっ。まだお腹空いてるでしょ？」

「あ、はい」

「お前ら、何手え繋いでんだよっ！ 俺に対する当て付けか？」

席に戻ると、ユウがそう言いながらわざとふて腐れて見せ、それを見たヒロキが笑った。その二人の横で祥子が楽しそうに笑い、青木は相変わらず一人で別世界にいるかのように、隅の方でボーっとしながら空を眺めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2025r/>

ドキめも...？

2011年12月3日13時49分発行